

テーマ「私は私でよかった」副題「浄土の縁として生きるとは、生きることの物語」

第1回1月7日夜

1. 人生を豊かにしてくれる物語りがある。

(1)現代人の多くが学んできた学校教育は物事を対象化して思考する

サイエンスの根本原理は、客観性と再現性である。いつでも、どこでも、誰がやっても、ほぼ同じデータが得られるときに、その結論がサイエンスの大系に組み込まれる。個人的な個別体験はデータから極力除かれるように配慮される。そのためには、「誰が何をした」と主語を使って表現するのではなく、主語を消して「何が起こった」と客観的に表現することが求められる。医学で言うと EBM(Evidence Based Medicine)、対象化の思考では自分が除かれる

資料1; 高血圧症の予後、有名医学雑誌の文献(2011年)、脳卒中を一回発症した人が再発する率が、その人の日ごろの血圧とどう関係するかという調査報告(収縮期血圧と脳卒中再発リスクを36の国の施設で2.5年間調査観察)。脳卒中の再発率は、血圧が

—120mmHg	8.0%
120—130	7.2%
130—140	6.8%
140—150	8.7%
150—	14.1%

であったという報告です。

医療文化の拠りどころの科学的思考による考えは確率を考えてよい方向へ、よりよい方向へと可能性を追い求めていきますが、個人にとっては満点が零点かです。

仏教はその良い、悪いの執われを超える道に我々を導く教え。どんな現実でも引き受けて生きる勇気を恵まれる道。

資料; バッファリンの効果、資料; タバコの発がん性

(2)非常に健康に留意されて治療を受けている60歳前後の男性患者に(十分な人間関係ができた後)、「健康によく気を使っていますね。健康で長生きしてあなたは何を実現したいのですか」と聞いたら、「それがまだ分からないのですよ。それを今、探しているんです」と言われたことがあります。一般の考えでは、生きることの目的なんて固いことは考えずに、生まれてきた以上生きていだけであって、死ぬ気になれないし、自分で死ぬ勇気もない、「命あつての物種」ということわざもあるように、生きてると、きっと未来に何かいいことがあるだろう、という発想でしょう。……… 目的か、手段・方法・道具か?

生きる意味はどんなに科学技術が進み膨大な情報が入るとしても導きだせるものではない。科学技術の恩恵を享受すればするほど、人間の意味や価値がますます失われていく。姜尚中(かんさんじゅん)1950年熊本生まれ

2. 人間として生まれた物語は(2011年の御正忌)

(1)善導の観経疏

「自らの業識を内因として父母の精血を外縁として 因縁和合して私が誕生」

自らの業識」とは「迷いの主体」

(2)客観的な世界と目覚め《智慧》の世界からの視点

(3)生きる物語へ展開

自我意識の誕生。自我意識の確立。ヒトから人間へ、そして仏へ。人間として成長・成熟。

本当の私になる。完全燃焼する。使命・役割・仕事を果たす。生死(しょうじ、迷い)を超える(解脱)。

仕えるものに出会う(仕合わせ)。仏から仕事をいただく。仏からの仕事に出会う。

第2回、1月8日午前(I)(II)

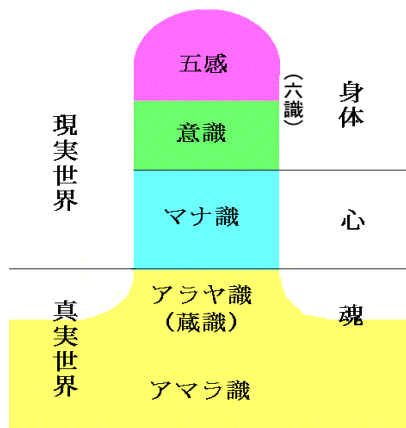
3. 「活命」と「生命(しょうみょう)」

我々の人間生活、——仏教では、人間生活を「活」と「生」とに分けて「活命」と「生命」という。食べて生きていくのを「活命」。これを「この世の生き方」という。この世に幸せをもとめる。この世を幸せに過ごしていこうというのが「活」の世界である。

「生」というのは、私の生きている意味、生まれた意義、何のためにこの世に生まれたのだろうか、——このまんま死んでいいのか、というのが「生」の問題。この「生」の問題を「往生」の問題、「往生の一大事」とか「後生の一大事」という。浄土真宗が目標とし、解決したいと願っているのは、まずこの「生」の問題である。

4. 生きる主体について

(1) 識 …… 意識、末那(マナ)識、阿頼耶(アラヤ)識



唯識仏教が説く「心の構造」、小山のように盛り上がっているのが、「私」です。図全体では、海の中に島が並んである。この島のひとつが一人の人間に相当。海底から立ち上がって海に浮かぶ島を、横から見たような形。

ひとつの島を、上から順に、それぞれ「五感と意識」「マナ識」「アラヤ識」を表す。「マナ識」「アラヤ識」は、唯識仏教の用語。心理学でいう「深層意識」や「無意識」に近いもの。この水平線から上は、私たちの目に見える現象世界。「五感と意識」には、帽子のように膜が被せてありますが、これは「身体」を表す。「五感と意識」は目に見えません。見えているのは、それらを包み込んでいる「身体」です。この水平線から上の部分は、死ねば無くなってしまいます。私たちが通常自覚できるのは、ここまでです。この水平線から下は、私たちにはほとんど自覚できない、いわば無意識の世界です。上にあります「マナ識」というのは、私たちの心の中で「煩惱」に支配されている領域です。「煩惱」とは、我痴・我見・我慢・我愛「エゴ」。

私たちは、この「エゴ」に「意識」を支配されております。そして「マナ識」を「自分

だと思っている。それが「我」と呼ばれる。それは「本当の自分」ではなくて、「エゴ」に支配された「偽りの自分」です。

その下に広がっている「アラヤ識」というのは、私たちの心の中で「煩惱」に支配されていない清らかな領域。

仏教ではこの領域のことを、いろいろな名前と呼ぶ。「涅槃」、「空」、「無我」、「如」、「真如」、「一如」、「仏性」、「浄土」、「阿彌陀仏」など、みなこの領域のこと。精神世界の伝統で「永遠の今」というのもこのこと(紫雲寺のホームページから)。

ここは、「エゴ」に支配されていないから「無我」と呼ばれる。この「無我」こそが「本当の自分」です。

智慧の目では、「本当の自分」は「仏」だということです。私たちは、みんな「いのち」の奥底で「仏」に支えられているのです。私たちは、みんな「仏」なのです。「エゴ」に妨げられて、そのことに気づいていない。

(2) 自我意識の発達

《1》. あたかも透明人間が眺める状態(自我意識のない存在が眺めている)

自分に気づく、すなわち鏡に映った自分の顔を自分の顔だと気付く反応は人間ではいつごろから起こるのでしょうか？ 生後6ヶ月ぐらいだと自分だという反応を示さないで、鏡の中の像(自分)を見つめたり、笑いかけたり、働きかけたりして、鏡の中に他人がいるという反応を示す。その後自分という意識(自我意識)が出てくる。

幼い子供で最初に育ってくる自我意識は、ただ自分のことだけを感じ取る主体ということができます。初期の自我意識は体の中に存在し、その中にあるけれども、そこから独立して存在しているのです。暑いと寒いと感覚の主体、物理的な生身の体の主体、寂しいとかうれしいという感情の主体、発育、発達する自分を知る主体としての自我、自我意識ということです。

《2》. 鏡に映るヒトは自分だという意識

普通、1歳半を過ぎるころ、言葉を話し始めるころに鏡の中に映っている像が自分だと気がつき始める。しかし、自我意識の発達過程の最初の自我意識は、ただ自分だけを認識する意識主体です。初期の自我意識は、他人の立場になって自分を見る、視点を他人の立場に移すというようなことはできない。写真の中の自分の姿を私と思う主体、自分が見ている自分だけの範囲に限定される。

自我とは意識する主体であり、自分の体の主です。眠っている時は自我は把握のしようがないのですが、目覚めている時は「私はここにいる」という認識の主体です。

いろんな動物を鏡のある部屋に置いて、その動物の鼻にマジックで目立つ色を付けます。動物が鏡を見ながら自分の鼻の色を気にするようになるか、全く無関心でいるかどうかを調べることで、自我を二つに分けているかどうか分かるそうです。猫や犬は気付かないが、オランウータン、ゴリラやチンパンジーは気付くそうです。

《3》. 意識の発達は後天的な要素も影響

自分の姿を自分だと認識できる能力はチンパンジーにはあることが確認されている。しかし、同じチンパンジーでも、生後すぐに隔離し1匹で育てたものでは、自分の鏡に写ったものを自分と認知ができないようだ。自我意識の発達は生まれつきに持っている能力だけではなく後天的に共同生活の中で発達したり、しなかったりという発達限界はある。ヒトでも生直後から動物に育てられると、いわゆる人間になれないという記録がある。

1920年インドの森で、オオカミに育てられた推定で8歳と1歳半ぐらいの2人の子どもが発見され、当時の子どもの行動は、まるでオオカミそのもの。犬のように食べ、暗い場所を好み、部屋の隅にじっとして、夜にはオオカミのように遠吠え

をする。笑わず、言葉は話さず、四つ足で歩き、直立歩行はできない。その後、牧師夫妻に献身的な養育を受け、年長の子だけが約9年間生き続けた。けれども、「はい」「いいえ」を身振りで意思表示するのに三年、「アーム(私)」などの幼児語を話すのに六年、「ご飯」「牛乳」など単語を話すのに九年かかった。

細胞分裂の過程でも受精卵が分裂して増殖してある一定の細胞の塊になる(これまでは万能細胞で何んにでも分化する可能性を秘めている)。この後の機能分化には周りの空気(これは何かまだ未解明の領域)を読むかの如くに分裂増殖(種々の組織、臓器に)していくという。この時点で細胞の塊ばらばらにすると分化がうまくいわずに細胞として死んでいくという。…… 縁起の理法にて説明がつくからすごい。

《4》. 見る自分と見られ自分の分離

自分と他人を分ける最も基本的なものは「からだ」です。自分の体を持つなら自分、そうでなければ他人。非常に単純なことです。この分別がないと、自分の顔を見ても自分であると認知できない、ということになってしまいます。

普通の人間は、自分という者はこういう自分だということを知っています。「自分のことは自分が一番良く知っている」という自分です。「知っている自分」と「知られている自分」の二つに自我を分けることができます。鏡を見て写っている自分と、それに気付く自分の二つということです。

私は小学校低学年の夏、パンツとシャツ一枚で遊びほうけていたころ、自転車に乗って人出の多い商店街のある地区に遊びに行ったとき、パンツ一枚でいる自分に恥ずかしいという意識(人に見られていることを意識した)が起こったことを記憶しています。あれが自我意識の発達の現れの一部であろうと思われます。

保育園の教師が園児に「みなさん、この紙は大切な物だから、お母さんかお父さん渡してね。忘れずにね」としつこく言うと、「先生、ぼく帰ったら渡すん？」と聞きに来る園児がいるといいます。「みなさん」、「みんな」という概念の中に、自分が入っているというふうに思えないらしいのです。初期の自我意識は、自分の視点からだけ自分を見ていて、他人の立場になって自分を見ることのできないのです。

《5》. 自分で自分を見る、から、他人の立場から自分を見る

普段、私たちがいろんな事象に出合って、それは自分にとって善か・悪か、損か・得か、敵か・味方か、勝ちか・負けかと、すぐに自分のことを考える自己中心的思考に似ています。未熟な間は他人への配慮まで最初は気が回りません。

自分の存在が他人に迷惑をかけてないか、嫌われてないかという、自分が周囲へ影響を及ぼしていることは考えず、他人から自分が馬鹿にされてないか、無視されたり、低く評価されていないかという、自分のことだけを意識する感受性も自我の発達に関係するようです。

自我意識の発達を調べる実験に「サリーとアン課題」というのがあります。4、5歳の子どもを前にして、劇で二人(サリー、アン)の登場人物を紹介し、ふたのある箱を二つ(AとB)用意します。サリーがボールを箱Aの中に入れる。サリーが席を外している間に、アンがボールを箱Aの中から取り出して別の箱Bの中に移す。しばらくしてサリーが戻ってくる。そこで子どもたちに「サリーはボール取るためにどちらの箱に行くでしょう」と質問するのです。自我意識の発達が十分でない四歳の子どもは「箱B」にボールを取りにいくと答えるそうです。五歳を超えた子どもは「箱A」と答えることができることが多いということです。自我意識の十分に発達した大人は他人の立場になって考える、すなわちサリーの立場になって考えることができるから、当然「箱A」と分かるわけです。他人の立場になって考えることの未発達な4歳ぐらいまでの子どもは、自分中心で見たり、考えたりしかできないから、サリーの立場を考慮できず、自分の立場で「箱B」と答えるということです。4歳から5歳にかけて自我意識は大きく発達する。他人の立場になって考えるということは社会生活をする上では非常に大切なことです。

私たちは成人する頃、自分というものはこういう自分だというように自分を知るようになり、そして知っている自分と、知られている自分の二つ分けることができます。即ち、主語としての「自分は」と目的語の「自分を」ということです。目的語としての自分、知られる私についてはさらに分化されていきます。

《6》. 見られる自分の深化

目的語としての「自分を」は自我意識の発達が進むと他人の目で自分を考えることができるようになるのです。すなわち自分が考える自分(自我A……自分の思いに近い)、そして他人の立場になって考える自分(自我B)、他人の目をもってみる「自我(自我B)」という二つの視点で考えることができるようになるのです。

自分が考える自分(自我A)とは「私のことは私が一番よく知っている」と誇りたくなる私です。確かに私の気持ち、嬉しい、悲しい、怒り、感動は私にしか分かりません。

他人の目で考える自分(自我B)とは、私は周囲の人に迷惑をかけていないか、私の存在が回りの人に及ぼしている影響、等についての相手の目になって自分を見ることで相手の気持ちを推察することもできるようになります。自我Aとは違って、自分を自分から少し距離をおいて客観的に見る視点でもあるのです。対外的に装って建前を尊重している世間向けの私(自分)。

この自我Bをみて、善・悪、損・得、勝ち・負け等を世間的に考えたり、他との比較をするようになります。時には他人から自

分の姿を指摘され、思いもかけない自分の現実を知ることにもなります。

他の人が、望ましいものを自分も手に入れることは誇らしい。……「他人の欲しい物が自分の欲しい物」

私たちは世間生活では自我(自我意識)の表に「お面」《体外的な顔》を着けて、常識人と自称しながら世間を生きています。私は職場で自我の上に「よき医師」として振る舞おうというお面を着けて表面上はうまく立ち回っています。世間生活で自我をむき出しにすると、お互いがいろいろと都合が悪くなります。

私がいかによい医師かのごとく振る舞っても、患者さんたちは私のことをよく知っていて、いや本当のことがばれていて「あの田舎の先生では分からないであろう。都会の大きな病院へ診察に行こう」とか、「あの先生は”やぶ“だけど、口は上手だ」と思われているかもしれません。

《7》. 自分のやりたいこと(仕事)

現代を生きる私たちは自分の意識が実体的にあるように思っています。若い人が「自分のやりたい仕事、自分になかった仕事を探す」とよく発言します。自分があるって、自分が決めると思っているのです。

仏教は「無我」ということを教えています。ガンジス河の砂の数の因や縁が和合して私という形を取っているが一刹那(註1)ごとに生滅を繰り返している存在だというのが私のあるがままの姿ということです。実体として確かな存在の私(我)としてあるのではなく、縁次第では次から次へと変化する可能性を秘めた存在だ(無我、無常)ということです。だから人生経験を積むと私の思いほど不確かなものはないと実感されることが多いでしょう。

養老孟司氏の対談記事によると、私たちは自分の意識で手や足を動かしていると思いますが、脳の研究ではたとえば水を飲む時には水を飲みたいなと思って水を飲むのですが、脳を調べて見ると、水を飲みたいという意識が生じる、その0.5秒前に、脳はすでに水を飲む方に動いているのです。生き物としての脳の活動が先で、意識とか意志というものは後だということです。意識が動かしているのではない、意識は後から発生するものだけということです。(脳科学の領域では常識となっている)

近代西洋的な考え方は、まず自分の意志というものがあって、それが世界を動かしてしまっていると思ってしまうのです。自分の意識がすべてを動かしていくという考え方が近代文明(ルネッサンス以後の人間中心的な考え方)の錯覚なのです、とまで言われています。

註1:刹那の長さについては諸説あるが、『大毘婆沙論(だいびばしゃろん)』では、1刹那の長さを1/75秒と示されている。しかし、唯識教学の開祖である龍樹は、刹那に具体的な時間的長さを設定する思想を否定している。人間の意識は一刹那の間に生成消滅(刹那消滅)を繰り返す心の相続運動であるとする。

《8》. 本当の私とは

昭和44年の学園紛争華やかなころ、学生大会で議論が闘わされる時、理論的に合理的で説得力のある論理に、頭の上ではなるほどと影響を受けるのです。その時は、自分の個人的な欲は抑えてでも正しいと思われる理論、主張に賛同すべきだという心情になるのです。そこでは、個人的な私情を出すことは憚(はばか)れるという気持ちになります。

学生が授業をボイコットするような国立大学は閉鎖するという声がどこからか聞こえてきた時、せっかく入学できた大学、そして医学部の学生としての身分を辞めなければならないとなると“困ったな”という、全身を揺さぶるような衝撃を私は感じたのでした。

個人的な私情は抑えて、理に従って行動すべきだという理想主義が頭を占める。一方では、自分の体全体では「わが身がかわいい」という思いが日和見の行動を起こさせようとする。いったいどっちの私の思いが本当の私なのかと、戸惑いながらも体が行動を駆動します。

本音の体全体での私、これが自我Aである。頭で理想主義であるべきだと考える自我B。自我Aと自我Bとが私の内部で対話をし、内部で葛藤(かっとう)するのです。

学生ばかりの福岡での対話集会では自我Bの勢いが良いのです。一方、宇佐に帰って田舎で農作業を共同でしながら強く感じるのは自我Aなのです。その当時はその格差の大きさに戸惑いは覚えたが、なぜそういう事態が起こるのか、納得のいくはずきは得られませんでした。哲学や宗教を食わず嫌いであった私には、俗物的な根性で、世間の中にまみれながら、それ以上の展開は不可能であったのです。その中で葛藤する自我を眺める、もう一つの自我Cが芽生えてきて、いったい自分とは何者なのか、と考える自我Cがいました。自我の分化、多元化である。

自分で考える自分(自我A)と、他人の立場に立って考える自分(自我B)が葛藤(かっとう)しているのを感じながら、私は一体どう生きたいのだろう、本当は何を欲しているのだろうと、私を問題とする自我Cが発達してくるのが思春期、青年期だといわれています。

泣いたり、喜んだり、怒ったりする私(自我A)とちょっと距離をおいて世間の目を気にしながら自分で実際に行動する私(自我B)が対話をする。その対話を眺めて、より理性的に知性的に考えて悩む私(自我C)。

人生とはこんなものだろうか、どうしたら心穏やかに生きることができののだろうか、私が小欲知足で慎ましく生きればよい

のだ、私が清く正しく生きればよい、しっかりした自我意識を作らなければ……などと、三つの自我が安定を求めながらも常に揺れ動き、苦しみ、悩み、迷うのです。

しかしながら、自分が理性的に知性的に考えていると思っている時は、自分の理性・知性が煩惱に汚染されて迷っているなどとは思いません。これが普通の常識で、みんなこんなものだ、これ以外に考えようがないではないか、変な意味での自信をもっているのです。

自我(自我意識)が迷っているのだということを全体的に見ることのできる4番目の自我Dの誕生を、仏教では目覚め、智慧(ちえ)の目をいただくというのでしょうか。

今を充実して生きる、生きていけると実感して生きるためには、自我意識と仏教の智慧との関係が大事。仏教の教えを良師・友を通して聞くと、智慧の大きな視点を細やかに知らされてみると、「自我意識」の問題点、課題に気付かされる。

《9》. 仏の智慧(無量光)に照らされて知る自分の相(すがた)

言葉を話し始めるころ、自我意識(自我A)が誕生します。その後、自我は発達分化して、5歳過ぎにちょっと自分から距離をおいて他人の目で自分を見る自我Bが分化していき、自我Aと自我Bは葛藤(かつとう)しながら生きていくこととなります。

思春期・青年期に自我Aと自我Bの対話を眺めて、より知的に考える自我Cが芽生えてきます。これらの自我意識が混しながら、心の安定を求めて私の内部で悪戦苦闘していくこととなります。

ほとんどの人はこれらの自我意識を迷いながらも生きていくことが人生だと思って生涯を終えてしまうこととなります。上を見てもきりが無い、下を見れば私より大変な状態の人がいるではないか。今の私、私の現状に感謝しなければと、自我意識を慰めながら世間生活の中に埋没してしまうのです。

我々はこの世に常楽我浄あり、いや、あってくれないと困ると考えて、安定を求めて常楽我浄なる物を追い求めて悪戦苦闘して人生を生きているのです。仏教は智慧(ちえ)、目覚めの目(自我D)で見ると、この世、世俗の世界には常楽我浄はない、自我の迷いを超えて目覚める(自我A、B、C、を超えた自我D)ところに本当の安定、安心、喜びがあることを教えて、今、今日、この大切さに感動する智慧の世界に導こうとしているのです。

自我意識が迷っているということを一体的に見ることができる4番目の自我の誕生が仏教の一つの目標であると思います。

迷いを超える智慧の世界がはたらいて、人の心をより自由に、解放へ導いていくのです。智慧の世界に少し触れてうなずくだけでも心は軽くなるのです。(智慧のはたらく場、世界を浄土という)

いつの間にか得になること、勝ちになることを心がけることを根性として身につけていた私たちは、持ち前の吸収しよう、学び取ろうとする餓鬼根性で、教えていただいたことも忘れて、自分の知識として、私のものと握って、私有化してしまっていたのです。

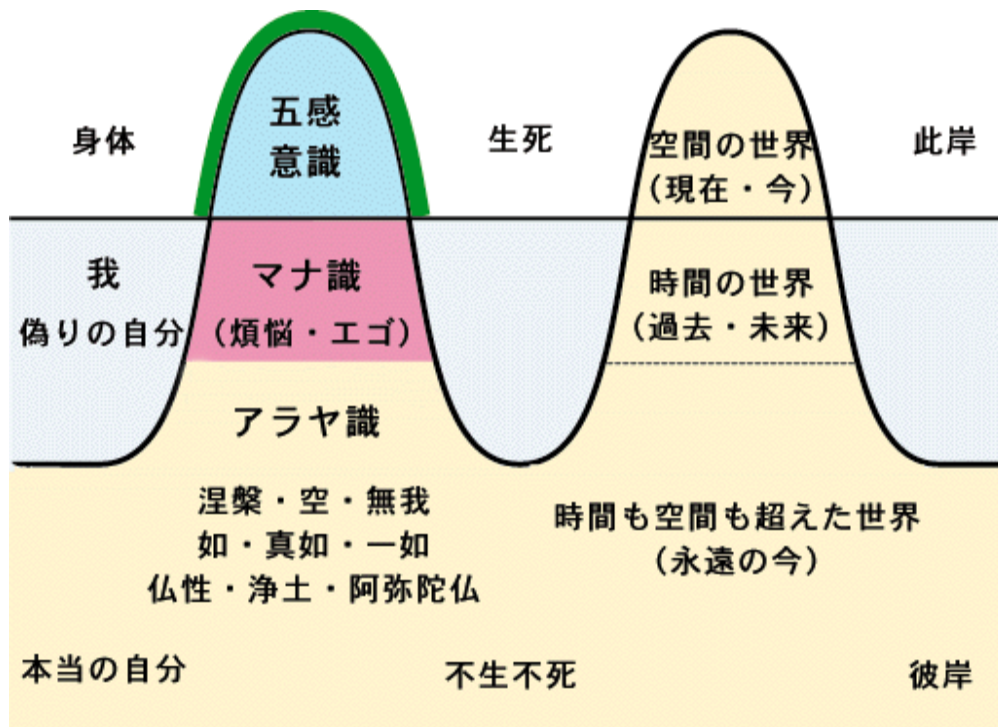
仏教では自分を照らし出す原理(教え、智慧、光明無量)と接点を持つことが大切で、照らし出されて知ることのできた知識を我が物として私有化してしまうと、かえって重荷となり、心の自由さを奪われることとなります。私が掴(つか)もう、理解しようとするのが、囚われを深くすることになるのです。

自我(エゴ)のとらわれから解放させる智慧の働きに接し続けて、照らされ続けることが大切です(往生浄土の歩みという)。智慧を無量光とも言います、照らされること、教えを受ける立場、被教育者としての謙虚な姿勢が大事です。

知らされれば知らされるほど智慧の世界の圧倒的な大きさに感動して“参った”と頭が下がります。知っていることを誇り、傲慢になるのではなく自分の愚かさを知らされるのです。

○「我等愚痴身」善導、「愚中極愚 狂中極狂 塵秃有情 底下最澄」(愚が中の極愚、狂が中の極狂、塵秃の有情、底下の最澄)(最澄『願文』(比叡山入山時の辞))、「予がごとき頑魯のもの、あにあへてせんや」(源信『往生要集』)、「十悪の法然房、愚癡の法然房」(『黒谷上人語灯録巻第十五』『法然上人行状絵図』)、「愚秃親鸞」(『愚秃鈔』他)「賢者の信は内は賢にして外は愚なり 愚秃が心は内は愚にして外は賢なり」(『愚秃鈔』)「愚身が信心」(『歎異抄』)、「頑魯信無比」良寛(頑魯まことに比無し)、「愚かなる 身こそなかなか うれしけれ 弥陀の誓ひに あふと思えば」良寛、「大愚良寛」、「春立つや 愚の上に又愚にかへる」一茶、「腹は立つもんや」石田操、「修行とはバカだったと気づくことだ」花園大学の元学長、森永宗興、自らを「愚」と言える人は、愚でないものに 出合った人である。(天岸浄円 法話)

物理・科学の法則・原則は自分とは切り離れた向こう側に、即ち客観的な現象の中の法則・原則・真理(理論的に真)があるということです。しかし、真実を知るということは自分と無関係に「真実」があるのではない。真実を知るとは、自分の虚偽の姿に気づく、目覚める事実になるのです。



感受性に二種類。
Sensitivity: 自分に対して非常に敏感である感受性
エゴイスト、良心的エゴイスト
Sensitivity: 目の前の他者に対して敏感である感受性

《10》「心」とは何でしょう。…… (念仏もうさんとおもいたつたころ)

心とは仏教語では「質多(した)」などと呼ばれ、「集まり」といわれます。様々な環境や条件の中から生まれ出てくるものということです。自分で怒ろうと思って怒る人はいません。同時にいつまでも怒っていようと思っても、怒り続けることもまた出来ないものなのです。つまり心とは固定した存在はなく、種々の因や縁の寄せ集めで様々に変化し続けているもので、決して一定ではありません。……霊というような固定したものを認めない。

仏教では「自我などない、無我」と教えます。自我とは「思いこみ」です。様々に起こってくる感情を「私の感情だ」と思いこむものを「自我」と呼ぶのです。それを「自分の心だ」とするのは大きな錯覚ということです。

心こそ、感情こそ自分だと思っています。しかしそれは違います。自我とは、「心を自分だと思ふシステム」です。私たちは自分の心だと思っています。しかしよくよく考えてみると私とは心に振り回されてきたのかも知れない。「心(感情)の奴隷」だったのではありませんか？ 様々にわき起こってくる感情を「自分が思っている」と錯覚しているのです。「私」とは、心への「執着」の別名です。心は身体のシステムです。私たちはそれを制御しようとしています。仏教は違います。端的に言うと、心を手放すのです。頭の中に浮かんでくる感情を「傍観」するのです。感情は諸行無常で常に変化しています。「生あるものは必ず滅す」です。怒りがわいてきたら「ああ怒りの感情がわいてきたなあ」と客観視するのです。私たちは、ただ怒りの感情を「私が怒っている」などと思いこんで生きてきたのです。

私から仏様を見る眼から、**仏様の眼を通して私自身の有り様を見ることへの転換を「回心」と呼ぶことができます。**自分の心だと思い、その心を浄化して行くことを宗教だと考えている人は多いのではないのでしょうか。しかし、仏教は違います。どこからともなく浮き上がってくるような「心」という感情の寄せ集めを、「自分だ」と思いこんで生きていることに「気付きなさい」ということです。

「自分の思いという錯覚から出る」体験。世間の価値観を抜け出る体験。自分は「心」を自分だと思いこみ、心が見せる「価値観」という幻影を「自分の人生観」だと思いこんで生きてきた。「自分の思い」と考える人生観から抜け出ることを「往生」と言い、心を手放した境地を「浄土」と呼びます。仏教における死とは、肉体の死のことではありません。「自分」という自我、心を離れることを意味しています。ですから、往生も浄土も、あの世のことではありません。

名号釈:「行巻」、まことに知んぬ、徳号の慈父ましまさずは能生の因闕けなん。光明の悲母ましまさずは所生の縁乖きなん。能所の因縁和合せしといへども、**信心の業識にあらずは光明土に到ることなし。真実信の業識、これすなはち内因とす。光明・名の父母、これすなはち外縁とす。**内外の因縁和合して報土の真身を得証す。(西聖典 P187、東聖典 190、島地聖典 12-37) 業識: 父母の和合によって母胎に宿る個人(子)の**主体である識別作用**。ここは信心の業識に喩える(西聖典註釈版187の下注)。業識で、**信心が発起する場所を表わしている。宿業識を言われている。**

真実信の業識………迷いの主体から、目覚めの主体へ(感受作用、識別作用、行為の様式、決断の仕方、決断の仕組みなど)

我々は宿業本能として、今ここにある。身はここにある《身は現実を受容している》。しかし、自我の分別心としての私は、その宿業が受け取れずに、宿業から逃れたい姿勢でしか生きられない。そういう私に諸仏称名「よき人の仰せ」を通して、本願が宿業の身の自覚(機の深信、迷いを繰り返して来た救われない存在)の存在として真の自の業識となったださる事実を「信心の業識」(目覚めの主体、存在)と示されているのです。

資料2. ;「微塵の故業と随智」(註釈版p169、島地聖典)

自力の心というのは人間の長い長い業の集積。業の集積とは、業は長い歴史を生きぬいて来たその経歴で、因、縁、業、果、報の積み重ねである。因は人間の持つ考え、無明煩悩、自己中心の考え、その無明煩悩が色々な縁を持って、働きをおこす。それが業。

色々な条件、色々な事件にあい、色々な人と遭遇し、色々な場所に出かけて行って、色々な事を吸収して、働きを巻き起こして来た。その結果があらわれて、その影響が残って、遺伝子の中に組み込まれて来た。何兆とか何千億とかいわれるものが人間の中にきざみ込まれて来た。それが果、報。人間には爬虫類時代や、色々な時代をへて、自分で自信を持ってしっかりやらねばいかんということを刻み込まれて来た。長い長い過去の集積である。因縁業果報の集積が自力の心、人を頼ってはいかん、自分でやらねばいかんということを刻み込んだ。

自力の心は人間の長い長い業なのだ、過去何万年以上の中で累積された考え方なのである。それは因縁業果報によって出来ているのであって、内容としては微塵の故業、数知れない古い業と随智、はからいとで成り立っている。

私というけれども、内容がないのです。私の中身はどこまでいっても私です。中身はありはしない(ドーナツ人間、中心が空で周りに実質)。記号といっしょです。そんなものを頼りにしているわけです。だから、私はこう思いますと言っても、思いはどんどん変わりますからね。結局、私はどんな人かは分からないのです(人間の微塵の故業と随智というのが本体、「我」ではない「無我」の私)。

仕方がないから自己の属性で自己紹介をする。結局、自己がないのです。決っていない。もっと言えば、まだ生まれていない(自覚に立っていない)。

身体は生まれたけれども、その身体を引き受けていく自己が生まれていない。本当にこの身を引き受けていく。それは身というものと別のもではありませんけれども、生まれた身が新たに生まれ出る。それは本当に身が生まれ出ると言ってもいい。どんな身か。

「本願に帰す。(念仏する私になる)」という身です。本願、南無阿弥陀仏が届いてくださって南無阿弥陀仏(これが私の現実、南無阿弥陀仏。私が南無阿弥陀仏になる)が往生していく。

資料3. ;「行業の地」(註釈版p27-29、島地聖典仏説無量寿経)

阿難「お釈迦様、法蔵菩薩という人は阿弥陀さまになっているのですか、まだなっていないのですか」と問う。「そりゃあ、もうなっているよ」「じゃあ、その阿弥陀様はどんな所においでなのですか」「極楽浄土だよ」「それはどんな所ですか」「それは春もなければ夏もない、山もなければ川もない、そういう国だ」と。そしたら阿難が「山もなく川もなかったら、住めないじゃないですか」と重ねて質問する。

そうするとお釈迦さまは、パッと向きを変えて「阿難よ、あなたは今どこに住んでいるか」と聞かれます。阿難は「私は行業の地に住んでおります」と答えます。そうするとお釈迦さまは「あなたは自分自身で、行業の地と言った。仏様も同じだよ。こんな簡単ことがどうしてわからないのか」と反論されます。すると阿難が良いことを言います。「お釈迦さま、実は私は分かっているんです。しかし、今から百年後、千年後に分からない人がいるといけませんから、代わって質問したんです」と。

第4, 5回、1月8日午後の(I)(II)

5. 生きる物語

(1). 生きる場

①世俗の場。傍観者;対象化の思考。自分と周囲の環境は別々のこと、私が好みで選らん生きることができる。小賢しく、うまいこと立ち回って、よいとこ取りをしていきぬけよう、という私の根性。生きているうちが花だ。

(a)仕合わせを目指しながら、不幸の完成へ、(b)人生の最後の……を廃品とする …… 文明の挫折

(c)身体の責任者を全うすることができない。(d)死の不安……「死への生」。(e)死亡診断書における「死因」

(f)老・病・死が受け取れない。(g)治療の概念, cure, care (h)いのちの尊厳はあるのか

資料4 ; 頑張れ 「おじさん図鑑」大分合同新聞2006年11月8日(平成18年) 飛鳥圭介

伯父さんは友人を病院に見舞った。友人はまだ40代なのにがんに侵され、医師から家族に余命を宣告されていた。久しぶりに見た彼はやせ衰え、おじさんはショックを受けた。が、「元気そうじゃないか」と、思ってもない言葉が口をつく。「元気だったら入院なんかしてませんよ——」いかにもつらそうに、友人は力なく答えた。おじさんは口ごもった。「その、ま、君は若いんだから、せいぜい頑張って、一日も早く治して——」 遮るように彼が言った。「頑張れって、私は必死に頑張ってます。これ以上、どう頑張ればいいんですか。教えてください」彼の目からは涙がぼろぼろ噴き出した。全身が痛くて、身の置き所がないような毎日ののだとも、泣きながら訴える。おじさんは顔をそむけて、涙をかみ殺した。「おれ、死にたくないんです。まだ死ねないです。助けてくださいよお」訴え続ける彼から目をそらし、おじさんは心の中でひたすら「頑張れ、頑張れ」と繰り返すばかりだった。こんな時「頑張れ」という言葉のほかにも、いったいどんな言葉があるのだろうか。

資料5 : 「生命と仏教」:能勢隆之(のせりゅうし)在家仏教 2010.10.1発行通巻第 59 巻、第 701 号p9-11

「生命とは何か」……「自分を認める能力を持つもの」と答える。

人間であれば皮膚の内側、単細胞であれば細胞膜の内側……他の一切と区別する。そしてその内側を「自分」と認める。生命はこれによって「生命活動」を始める。……認めた「自分」の益するものを追求め取り入れる、損(害)するものを排除し、それから逃げようと活動する。「追う」と「逃げる」、「取り入れ」と「排除」が生命活動である。一切の生命活動は、どんな高級なことであれ下劣なことであれ、この範囲を出ることはない。

自分を認めることによって始められる生命活動は、必ず「自分中心」であることを本質とします。それは自分の欲望の追求です。……「思うとおりに」したい。そこに生命と生命の争いが始まる……取り合い、比べあい……劣るものは傷つけられ、勝るものは傷つけることになる……その繰り返し……「罪」深い生き方となる。

思うようにならない……苦しみとなる。生命活動は「罪」と「苦」の繰り返しを逃れることが出来ない。止めることは生命の死である。私だけではない、誰でもこうして生きている、逃れられない、だから仕方がないんだと思う……そう思いながらこの生き方に全面肯定はしてない……罪の意識、罪を感じている……心のどこかに、「こうではない別の生き方はないか」と、探し求めている。この心を与えられ、この心を持つ存在は人間だけであろう。釈尊はこの罪と苦しみの生き方を脱する道を探し、王位を捨てて出家し道を得て、仏となった。

「苦」こそ人を仏道に導き、真実に目を開くことを促すのである。思い通りに行かない……人は苦しむ……「苦」の事実が「思うとおりにならない」ということが「真実」であるということを示しているのです。……これを「苦諦(くたい)」と言う……「苦という真実(諦)」の意味です……苦が真実なのです、楽が真実ではないのです。……私は「思い通りになる」のが当たり前、と間違っていたのです……「顛倒(てんどう)」していた、逆さまに思っていた。

「我」とは「自分」です。「自分」というものがあって、それは「自分」の「思いとおりにできる」、そういう「主体」がある、と思っています。その主体が「自分」であり「我」です。ところが「思い通り」にならないとすれば「自分(我)」と言うものの存在根拠が危うくなり、失われねばならなくなります。

「思い通り」になる「主体」が「有る」というのは「仮定」でしかなかったのです。生命はそういう主体である「我(自分)」が「有る」と仮定することによって活動し存在することができるのですが、それはあくまで「仮定」であって、「実」の「我」が「有る」ではなかったのです。これを「無我の道理」と言います。仏の教えによってこの「無我の道理」を知れば、「我」は消え去らねばなりません。それは万年の間も、光によって瞬時に消え去らねばならないのと同じです。

生命は、虚無であり仮定でしかない「我」を作って認め、執することによってのみ活動します。それが現実の「私の生命」です。その現実の生命を「無我の道理」に照らして生きて行く、そこに「菩薩道」が開かれるのです。……この現前の事実を南無阿彌陀仏と念仏で受け取って生きていく。

②往生浄土の場。依正不二、身土不二。「自分が生きている」ということを成り立たせる大きな場に気付く時、「生きる意味《物語》」が与えられてくる。(本多弘之)

願生偈(浄土論)(島地聖典8-12) 観彼世界相 勝過三界道 究竟如虚空 广大无边際(三界;欲界・色界・無色界。欲界は生死流転する六道、色界は欲を離れた清らかな世界。無色界は物質を超えた精神の世界)

浄土の世界广大で無辺際である。平野修師は「誰もが自分が世界の中心にいると感じる世界」と解説。

自分が生きることを成り立たせる場。それは自分のためにある場。「親鸞一人がためなりけり」という言葉がありますが、自分のためであるということが見えると、不思議な感覚ですが、みんなが同じようにいる場であると見えてくる。その場を見る眼(まなこ)とは、自分で見ようとするものではなく、どこかで自分を見ていると感じられる眼が、自分にいつも寄り添って励まし、育て、時には厳しく批判して下さる。【全ては私の為に(私を生かし、支え、教え、願い、……)、歴史の最先端の私、人類の代表としての私、仏のはたらきの証明者として】

老の身に何がある 病の床に何がある 死の時に何がある その若き日に何を求めたか

その健康の日に何を求めたか 死の一呼吸まで何を願ったか 一生を貫いて 汝は真に汝を知り得たか
一生を貫いて 汝は汝になりきることができたか 一生を貫いて 汝は汝の使命に生き得たか
若きも 老いも 病む人も真実教を聞いて この出世の一大事の解決を得よ
憶念弥陀仏本願 自然即時入必定 唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩
横超無碍の天地がそこにある (住岡夜晃著「讚嘆の詩」306ページより)

(2) 浄土を生きる「遇縁の凡夫」、(遇縁の凡夫と分かることが仏の働きを受けているということ)

清沢満之は「天命に安んじて人事を尽くす」と言っています。事实は、自分の自由な選択で自分があるのではない。なぜこんな時代に、こんな身に産んでくれたのか。誰も自由に生まれでた存在というのはないのです。

これは取り方によっては運命論になってしまいますが、そうではない。一つの存在はもう深い因縁の中でたまたまこのいのちを賜ってある。そういう智慧の眼が開ける。そして自分の与えられている有限な条件で、自分のできる範囲で「なぜ」という問いに対して一生懸命向き合う。生きる意味を問うというよりも意味が与えられてくるのです。

人間は、なぜここに生きなければならないのかという意味を、与えられた相対的な条件で探そうとします。人と違ったこと、大きなことをやったというかたちで意味づけをしたいのです。あるいは他を踏みつぶしてでも豊かさという意味をつくらうとする。それは人間の傲慢さであり罪でしょう。しかし人間を没個性化、器械化していく社会の中で、たとえ愚かであろうと、罪が深かろうと、この自己は他のものには代えがたい。だから意味を問わざるをえない。

資料6 ; 人間の心を取り戻す(平野恵子)

「人は自分のものさしを決して捨てることはできないけれども、浄土に触れることにおいて、ものさしを武器として他人を傷つけないではおれない自分の存在を悲しみ、「ごめんなさい」「ありがとう」と言わずにはおれない、人の心を取り戻すことができるのです。」、法蔵館「子どもたちよ、ありがとう」より

(2) - 1. 道元禪師、フランクルの言葉:

資料7 : 「自己をはこびて 万法を修証するを迷いとす。万法すすみて 自己を修証するはさとりなり」(道元禪師)

普通の我々の考える視点は自己から外の世界を見る方向性があります。考える自己の立場は変わらず絶対確実な自己として、自分以外を私の意識の操作の対象として見ていき、自己の意識はあらゆる事象や自然の中に侵入してそれらを支配し所有者のごとくなっています。ある意味では私の意識は神みたいに全能者になっているのです。そして世界全体を相手に上から見下ろすかのごとくに見て判断していきます、一見「勇ましく」見えますが、その背後には上に立つ者の宿命ですが無意識のうちに不安と孤独の陰を伴っているのです。

仏教の視点は自己からでなく世界の方から自分を照らし出してくれる認識(心身一如、一体化、相即の論理、自と他を分断して考えない)が本当の「悟り」「目覚め」であり正しい認識であると教えます。仏教の智慧の光(無量光)に照らし育てられ(照育)、ついに私の殻が照らし破られる(照破)。そこでは自分の愚かさを限りなく知らされ、懺悔せしめられ、仏法の大きさに驚き、仏法に出会う為の人生であったと感動するのです。

人生の出来事(試練)は私に何かを教えんとして存在する。人生への大きな信頼のもとに、自分の現前的事实、仕事を背負って取り組んで行くのです。そして人間としての成熟へと導かれるのです。よき師、よき友との人間的な出遇いを通して感得される世界です。

対象化の認識では局所的には十分に機能しますが、自然物や生物を対象とする時には全体が見えないという弱点があり、また自分の姿が見えないという大きな課題を抱えています。自分の位置、姿を問わないので傍観者、無責任な評論家の立場を取る。立場が定まらないから方向性も出てきません、その姿を仏教では迷っているといえます。

仏法の教える認識は「生きる力」に結びつきます。それは依正不二といって環境(依)と主体(正)は二つではなく一体であるという認識です。自分の位置がはっきりするとき、自然と自分の生きて行く方向性も出てきて、意欲も備わってくるのです。

「教え」には単に知識の受け伝えだけでなく、「教えて——せしめる」という使役の意味があります。教えを受ければ受け手は変わるのです。教育を受けて変わらないと思っているのは知識だけの伝授を教育と思っているからです。

資料8 : フランクルの言葉

強制収容所で言語を絶する苦難と苦悩の生活、むちと飢餓と過酷な労働で、病におかされて死者が続出した。その中で絶望の故に自殺を希慮した二人の男性を救う経験をした。一人の人間は彼が並はずれた愛情を持って居る一人の子供が外国で彼を待っていたからであり、他の一人には、彼の仕事が待っていたからである。彼は科学者としてあるテーマについての本のシリーズを書いていたが、それはまだできあがってなく、その完結を待っていたのである。

待っている仕事や待っている、愛する人間に対して自分の責任を意識した人間は、自分の生命を放棄することが出来ない

のである。その人達は、フランクフルに依れば「人生の意味」をしっかりと自覚した者にはかならないのである。

フランクフルは続いて、人間はもともと「意味への意志」、即ち自分の人生を出来る限り意味で満たしたいという憧憬によって精神が吹き込まれ、それによって生き甲斐のある生活内容を得ようと努め、自分の人生から意味を闘い取る。この意味への意志は生理的欲求と社会的欲求とは違う実存的欲求ということが出来る。意味への意志は生きるの何のためか、という生きる意味、生きる目的の追求である。それは人間独自の実存的欲求で、この欲求が満たされなければ、われわれは人間として満たされないのである、という。

通常我々は自分を中心にして人生の意味を問い、人生から何かを期待しようとする。自己中心から世界を見る見方である。ところが、この様な見方では強制収容所のような絶望的な状況では耐えることができない。期待すべきものは何もなく、あるのは絶望だけだからである。ここで思考のコペルニクス的転回が必要である、とフランクフルは言う。すなわち、自己中心的に人生に何を期待できるか問うのではなくして、逆に「人生は何を我々から期待しているのか」という観点に変更されなければならない。くどいようであるが、自己から人生を問うのではなくて、人生から自己を問うのではなくてはならない。

我々は生きること自体「問われている」ことであり、生きていくことは答えることにほかならない。日々われわれは問われている。その要求に応じて、自らの使命への意志を遂行することである。

日々の要求に応ずる——私も今問われている。迫り来る老いと死に、どう応えるかが問われている。私は応えていかなければならない。

資料9 ; 「死」から「生きる意味」児玉里子（崇信 2010 年4月1日発行第40年472号p9）

日本の自死はこの11年間、毎年3万人を超えています。「自らの命を断つ」ということは、それは生きる希望が失われ、「自らの命がなくていい」と。そこには絶望、悲しみ、痛みが感じられます。そうしてそこに孤独を感じます。V・Eフランクフルは、あの強制収容所での体験から、生きた人と、死にゆく人との分かれ道は「生きる意味、意義」を見出したかどうかであったと言っています。あの極限の中で、生きる希望を見出せるかどうか、ということはとても難しいことだったでしょう。フランクフルは、母と妻が生きていると信じ続けることであったと、この苦しみは、妻と母のためだと思うことによって耐える。それが生きる意味になっていた、と。この体験から「ロゴセラピー」という精神療法を打ち出しました。

ロゴセラピー [logotherapy] 実存主義を背景とする精神療法。生きる意味や自己存在の意義を重視する。

「生きることが無意味であると思うと絶望が……しかしその絶望が病気ではなく……一人の人間が精神的に成熟しているという証拠である」と。そこで「生きる意味・意義を見出せば生きることができる」ということであると述べています。運命の暴力、自分の力では保障できない、自分の運命にいかなる態度をとるか、いかにそれに耐え、いかにそれを十字架として受けとめ、それを担うかということが問題であるといっています。

「苦悩の中の勇気」、没落も失敗もありましょう。自分が原因でないのに無残な思い、誹謗、すさまじい卑劣に会うこともありましょう。そこにおいて自分の生きる意味、意義を見出したなら、なんとでも生きることができるということを述べています。でも現代はこんなに自分を無くしてしまう人々が多いのは、自分の意味、意義を見つけることが難しい時代なのでしょう。……略……今の時代、無関心であることが多くの問題を起こしています。自殺、犯罪、引きこもり、無感動、無視、孤独、自暴自棄、見捨てられた感覚、自己否定感、精神暴力——人間の人格、尊厳を傷つけます。集団でする無視、無関心は罪です。

日本社会は、自分たちの秤や物差しからはみ出れば不要、無用と弾き飛ばす。優秀、効率の価値観、同類という感覚からでしょうか？ 人間不在の歴史を感じます。その人、それぞれの存在の人間性、能力を認めるより、自分達の世界を作ることが大事であり、資本主義の自由競争も原因であると思います。そこには日本の「滅私奉公」の精神が「滅私奉社」に変わっただけで、そこには大事な人間だ、尊い一人だという人格不在が続いてきてしまったようです。そのために沢山の悲惨な自殺者が出ました。家庭も壊れました。社会から孤立、孤独も増えたと思います。

この年間自死3万人の悲しみは、残された家族の悲しみを思うとその何倍もの悲しみにつながるのです。この不況、厳しい仕事難の時代ですが、V・Eフランクフルは「職業と生活と使命との同一化こそが……失業が自分を無益で余計者であると悩ませるが……人間は職業のみが生きる意味ではない。生きる意味、意義をそれぞれ実存の意味、他者に代わられないものであること、人格的なかかわりをいかに行うかであらばいい。」と述べて、実存主義を唱えました。

資料10 ; 私に成る ………「高僧和讃を読む」大峯顕著（下巻、本願寺出版社）より

現代では、自分はお浄土に生まれることは別に必要とは思ってない、仏に成る必要もない、私は人間で結構、という人が非常に多くなったわけですが、まさしく、その人間であるということはどういうことか、人間とは何かが、仏教の根本問題なのです。実は私達は、仏に成ることがないと本当の私になれない、本当の人間になれないわけです。

第6回、1月8日 夜

資料11;羽田信夫先生の講義録(土曜会通信)

(2)－2. 三木清の『人生論ノート』:

「幸せとは人格である。人が外套を脱ぎ捨てるように、いつでも気楽に他の幸福を脱ぎ捨てることのできるものが、もっとも幸福な人である。彼の幸福は、彼の生命と同じように、彼自身とひとつのものである」

(2)－3. 三浦梅園(大分県、江戸時代、医師、哲学者):

「人生恨むなかれ 人知るなきを 幽谷深山 華自ずから紅なり」(私は私で良かった!)

(2)－4. 詠み人知らず(古歌): 「あれを見よ 深山の奥に 花ぞ咲く まごころ尽くせ 人知れずと」

(2)－5. 人間存在の本来的なあり方を超えて:「すでに人生の旅路を終え、憂いをはなれ、あらゆることがらにくつろいで、あらゆる束縛の絆を逃れた人には、悩みは存在しない。」(ブツダの真理の言葉:中村 元 訳, 岩波文庫, 1978年、P、23)

———外からの束縛と内なる束縛からの解放:自由自在

資料12 ; 分段生死

人の身は寿命・果報などに一定の限界があるところから分段という。分段生死とは、凡夫の迷いの世界の生死で、良い、短かいで測られる身命、分かれて段々(生・老・病・死)になって起こってくるということで、一つの問題は解決したら、また次の問題が起こってくる、その問題がやっとのことで解決したら、また次の問題に悩まされて、「やれやれ」ということがない。身体とその寿命とに分段(限界)がある生死、ふつうわれわれ凡夫がこうむる生死のあり方。それは、生と死を実体視し、分段(分断)している立場である。従って死は生を断ち切るものであり、生はいつも死に脅え、死の不安を持った生である

私の生涯は、どこまでいっても「生死の苦海」です。分段生死です。それが仏法をいただくことによって「変易生死」にかわってくる。生死は変わりませんが、その受け取り方が変わってくるのです。

それに対して、仏の悲願力によって身命を改転したもの、つまり、定まった際限のない生死を「不思議変易(へんにやく)生死」という。この場合、変易とは、姿形の区別や、寿命の長短でなく、普遍の意味である

仏教では、人間にとって不如意且つ不可避な生死の苦からの解放を、分段生死を離れて、不思議変易生死の自覚という生死観への転換によって果たしてきた。この立場に立つ時、無生無死の永遠の生命、或いは、「生死分かる以前の無相の生命」、即ち、「無生の生」を悟ることが出来るとするのである。

(1)「生きてよし、死んでよし」(妙好人詩人木村無柏)、 (2)「生のみ我に非ず、死も亦我等なり」「死生の大事をこの如来に寄託して、少しも不平や不安を感じることがない」(清沢満之、[我が信念]の言葉)……………深き人生、納得出来る人生 (3)「生と死の うねりをなして 常住の いのちの水の 流れゆくなり」、「無量寿を 念ふところに 死を超えて 生も思はず ただほがらかに」暁鳥敏師の歌。……………不思議変易生死の生命を朗らかに歌いきった。

長短の価値観を離れ、「今」に目覚め、「永遠」に出適った人達の言葉はそのことを最も端的に証している。古来、深い信心と不思議変易生死の内観によって生死を超越して生き切った人を誕生させてきた。

不思議変易生死

身体とその寿命との長短を思いどおりに長くも短くも変化させることができるような生死のあり方をいう。初地以上の菩薩が行う生死である。迷いの凡夫の生死(分段生死)は超えているが、その超えた境地を現実に実証する務めが残っているために、主体的かつ自由自在に現実の生死に対応することを意味する。この生死は無漏(むろ)の業を因とし、所知障を縁として引き起され、分段生死が有漏の善・不善業を因とし煩惱障を縁とするのと異なる。

所知障を縁とするとは、上求菩提(じょうぐぼだい)・下化衆生(げけしゅじょう)を目指す菩薩は、求むべき菩提という法があり、済度すべき衆生という法があると考える法執(ほっしゅう)から所知障をおこすからである。

< 変易生死 > とは、知るべきものが正しく知れないこと(所知障)を縁として、三界の外から如来の悲願力によって回心し、生まれ変わった自己をもって(～悲願力に由って身命を改転し)、再び この三界に来たって衆生済度の行を修めて、仏になる。

彼は、すでに分段生死を乗り越えており、因縁によって 自己の生死を決定されることはない。彼の生死の概念が、全く違うものとなっているのである。今、生きようが死のうが、そんなことは 少しも問題にならない。限りなく この世の中に入って行って、そこに生き悩んでいる衆生の現実を知ろうとし、その者に寄り添い、その者の腕に己の肩をさし入れて支え、その者の真の救いを成就せんとすることが、彼の生命となっているのです。

菩薩の願いは、ただ1つ。一切の衆生を真に救うこと。この世に一人でも、救われていないものがあれば、自分は仏にならない。

(2)－6. 人間存在の本質を構成するケア(CARE)を「気懸り, 憂慮, 不安, 気遣い」と捉える。

対人援助をその「気懸り, 憂慮, 不安」を受け取り担う(気遣い)ものである。援助する者も、援助される者もこの「気懸り, 憂慮, 不安」に飲み込まれることなく、共に喜ばしく援助を享受できるためには、更に今までの考えを超える立場が必要。「明るさ、くつろぎと喜び」を持てるように。――最終的には

(2)－7. 『余命1ヶ月の花嫁』その中で長島千恵さんの言葉。

「皆さんに明日が来ることは奇跡です。それを知っているだけで日常は幸せなことだらけで溢れています」、「生きてるのって奇跡だよ。いろんな人に支えられて生きてるんだよ。私これで元気になれたらすごい人間になれると思う」

(2)－8. 「人は、はじめから人であるのではない、人になっていくのです」(森有正)

資料13 . 石垣りん 「くらし」

「食わずには生きてゆけない メシを 野菜を 肉を 空気を 光を 水を
親を きょうだいを 師を 金もころも 食わずには生きてこれなかった
ふくれた腹をかかえ 口をぬぐえば 台所にちらばっている にんじんのしっぽ 鳥の骨
父のはらわた 四十の日暮れ 私の目にはじめてあふれる獣の涙」。

(2)－9. 「私がいるのでは無い、私になっていくのです。私が行為するのでは無い、行為が私を作るのです。」

資料14 ; 高史明師の文章

[在家仏教の平成16年12月号]で考えさせる所があったので紹介します。

「ある女性からお手紙を頂いたことがあります。その人のお母さまが、ボケはじめた。症状がどんどん進行して、ついには下のものを家中に塗りたくって歩くようにもなった。すると娘さんは、お母さんはそんな惨めな姿になってもまだ生きているのか、早く死んでほしい、と思うようになった。その極限で、とうとうお母さんが亡くなりました。すると周囲はほっとするわけです。その女性も、これでお母さんも私も楽になった、と最初は喜んでいました。この女性は仏教に縁があったのです。49日が近づいてきて、ふと気がついたのです。ボケた母の姿、これはお母さんではない、もう見たくない、そう思っていた。ところがその母は最後の力をふりしぼって、あるがままの私の姿を見せてくださった仏様だった、と。あるがままにあるがままです。そこに真実のいのちが生きてくる。

対象化する知恵は迷いであることに気がつかなければ、親孝行の娘であっても、親が早く死んでほしいと思うような闇に落ちるのです。ここにこの娘さんのいのちの回復があります。私たちは生きていますけれども、その偽の知恵に、真実の生のありようを見失っているわけです。ですから死に至る病になるのでありましょう。死んでいるということがわからないのですから、生きていくということがわかるはずがありません。」

資料15 ; お釈迦さんの目覚めた世界を「三千大千世界(注釈版p17、島地聖典 1-15)」という。世界というのは現代の科学でいえば地球とか太陽系とか銀河系という事でしょう。お釈迦さまは宇宙の全体を見た、そして過去・現在・未来を見たという。過去とは自分が生まれるずっと以前から、未来は自分が死んでずっと先まで、その一点に自分がボゾンというわけです。伝教大師最澄は「昨日の自分を知らうと思つたら、今日の自分の姿を見よ。明日の自分を知らうと思つたら、今日の自分の行いを見よ」と言われたという。……これは「縁起の法」の味わいということとされます。

資料16 ; 福岡伸一さんの「動的平衡」の考え、資料「センス・オブ・ワンダー、生命への畏敬と驚き」、サンガ、東本願寺首都圏広報紙、2011.09.01.No.113 より

「近代科学というには、生物を物として考えて分けけてきたんですね。その見方でDNAはじめいろいろな情報が分かったけれども、生物をものとしてみるということは、実は時間を止めて見るということなんです。フリーズした状態で見ると確かにものの固まりです。しかし停止のボタンを解除して見ると、生物は絶え間なく動いている。80年前にシェーンハイマーが実験したように、生命は流れていく現象なんですね。

だから逆説的であるわけですが、生命というものは変らないでいる為に変わり続けているということなんです。一瞬たりとも同じ状態は無いのです。常に変化して新しい平衡を求めていく。鴨長明は水野のがれに譬えましたが、その流れのところに生命の価値がある。そういうふう生命を考えると、生命について自由さとか希望が見えてくるんじゃないかと思えます。

(2)－10. 利己的遺伝子、イギリスの動物行動学者Rドーキンスは1976年に、『The Selfish Gene』(邦題『利己的な遺伝子』)人間は遺伝子の乗り物である。(生命維持と自己複製のために遺伝子に操られて動いている存在)、

第7、8回、1月9日 午前 (I)(II)

(2)－11. これからがこれまでを決める (藤代聰麿(としまろ))

持ち越し苦労と取り越し苦労

五木寛之; 私は終戦を北朝鮮で迎え、混乱の中で幸運にも日本に帰ってきた。たすかりたいがために人を押しつけてきた、あの時の罪悪感が重く残っている。私は親鸞聖人が罪を責め続けながらも生きていける道を見つけたという「歎異抄」に深い共感を覚える。親鸞聖人以外にそのように語る人はいなかったのではないだろうか。

(3). 働くというのは、そのままが目標でなければならない。

資料17 ; 労働観「念仏者の道」、信楽峻麿、法蔵館、2004年

生活の中で念仏する。

念仏の中に生活する。「義兄の仕事は楽しんでしている。私の仕事が苦しんでしている。」

第9回、1月9日 午後

資料18 ; 人生訓の変遷: (脇本平也、在家仏教H17年12月号、今月の巻頭言)

旧制中学時代、「精神一到、何事か成らざらん」と墨書して机の前の壁に張り、受験勉強に励んだ。奮闘努力の効もなく、残念ながら最初の高校入試は落ちた。どうも精神が未到だったらしい。殊勝に反省して次に思いだした格言歌がある。「為せば成る。為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり」。今日の自己責任の認識である。なかなか潔くて若々しい。浪人を1年して、2度目に見事合格した。

しかし、物事はそう簡単には行かないということがだんだんに分かってくる。思い返して見れば、至難の高校入試を突破したのも、要するにまぐれだったかも知れない。その証拠に、俺より学校の成績のよかった奴が落ちている。成功も失敗にも、どこやら偶然で運次第という気配が漂っているようだ。

高校時代、時に血のまじった赤い小便が出るほど剣道の練習に励んだ。強くなったことは確かだったが、試合での勝ったり負けたりは不確かだった。いわゆる学徒出陣で始まった1年8ヶ月の海軍時代、一瞬の運ということ思い知らされる機会に何度も遭遇する。ここで「人間万事塞翁が馬」という譬え話に共鳴した。「吉兆禍福はあざなえる縄の如し」。

戦死した友人たちには申し訳ないが運良く生き残って、宗教学の勉強を続けることが出来た。その課程で、運命の女神と神の摂理とか縁起の理法とか天命とか限界状況としての偶然とか、運という日常用語につながるのありそうな術語に出会う。共通しているのは、人間の力ではどうにもならぬ事の成り行きが厳として世界を支配しているという教えである。この上は「人事を尽くして天命を待つ」しかないか。

このあたりで清沢満之にであった。いわく「我は寧ろ之を、天命に安んじて人事を尽くす、と云はまく欲す」その人事を尽くすことも、生来の怠け者には自力では不可能というほかない。そこでまた満之はいう「如来の威神力に任せて、無責任なり」。自己には何の責任もない。八十半ばの隠居の身に至って、気楽な無責任主義の人生訓に共鳴し感謝する昨今である。

資料19 ; 修行の場としての人生(宮森忠利、崇信、2011年9月1日、489号、p5)

「大涅槃を証する」(正信偈)とは「ある人の生涯の意味が仏道の成就ということを目的にしたものであって、それが達成された」ということだと教わった。

その生きた姿として、私は晩年の出雲路先生を憶い起こした。先生は病床にあって、「専光寺に生まれたことがご縁となり暁鳥先生にお会いし、そのおかげで仏法に遇うことを得ました。もしそのことがなかったら、たった62歳で寝てばかりいなければならなかった身を恨み、暗い毎日を送るしかなかったと思いますが、おかげさまで本当におかげさまで病状が悪くなくても、それを静かに引き受けさせてもらうという、たしかな一日一日、静かないわば寂光の中の日とでも申しましょうか、そうした日を過ごさせていただき、寂光の中の日暮を頂いています。」と記された。先生の修行の場としての人生を成就され、浄土に還られたのだ。

私には、出雲路先生が私たちの結婚式の場で、「結婚するとは修行の場をいただくことだ」と語られたことが忘れられない。そこにはこのこと一つを見失わないようにという思いがこめられていたように思う。

会の後、「人生(結婚)は修行の場である。人生は教えに教えられていく修行の場だと聞かされた時、感動しました」と、語られた方があった。私たちが生まれてきたことの意味の発見があったのだと思う。

資料20 ;

「働哭」(福岡県水巻町、松尾高林・76歳、平成21年10月15日毎日新聞、「男の気持ち」のコラム記事)

「私の病気のことを絶対、題材にしないで」と、来年古希を迎えるはずだった妻に釘を刺されていた。その御法度が無効となる時を、初秋の日曜日に迎えた。7年前、福岡市の病院で左乳房の下のしこりを「悪性リンパ腫」と診断された。初めて聞く病名だが、白血病と同類の血液病であると理解した。すぐに入院となり4ヶ月後、治って元気に退院し、これで安心と楽観していたが、その後約2年おきに再発して入退院を繰り返した。

入院期間は約1年。その間、妻は愚痴一つこぼさず前向きに病と対座し、元気なうちに友人たちと海外旅行を楽しんでいた。今年の7月から北九州の病院に移り、通院していた。異常が起こったには、友人の初盆参りの帰りにスーパーで買い物をした4日後。肺炎で重体となり、それから個室で息を引き取るまでの18日間、妻に付き添った。亡くなる3日前の夜中、弱音を吐いたことのない妻が酸素マスクの下で「もう、頑張れない」と言った。私は妻の額に額を押しつけ、「頑張らないでいいよ」と言って慟哭した。

「泣かないで。長生きしてね。お浄土であえるから」 「あとから行くからね。僕でよかったですか？」

「うん」とうなずいた。最後まで立派過ぎる妻に、額を重ねて泣き続けた。

金婚式まであと2年余り。妻であり親友であった女性がたくさんの思い出と私を残して旅立った。

資料21 ;山科だより(9)川島弘之、(崇信、2011年9月1日、489号、p4)

「現実はそのみでなくて、しかもけってそれだけではない。」

これは、畏友笠原初二に宛てられた滝沢克己の言葉である。部落解放運動に関わる中で、社会矛盾の解決だけでは克服できない虚しさと絶望に直面し、笠原は、恩師の滝沢に手紙を書いた。返信を読んでアツと思ったという。「現実はそのみでしかない。しかし、我々が”現実”と呼んでいるだけではないものがある」ことに気づいたという。(いまなぜ親鸞なのか、笠原初二著、法蔵館、)

聖人の仰せには、「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり。そのゆゑは、如来の御ところに善しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、善きをしりたるにてもあらめ、如来の悪しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、悪しさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」とこそ仰せは候ひしか。(歎異抄、後序)

それだけでしかないものとは何か？。「ただ念仏のみぞまことにておはします」と言われているように、その問いにこたえるものとして、念仏はある。

誤解を恐れずに言うとするれば、あらゆる人間の苦悩は最終的には自我意識の問題に帰着する。失われた幸せ。失われた家族、失われた漁船、失われた工場、田畑、家畜等々、それは全て家族を失った私、漁船を失った私、工場や田畑や家畜を失った私の問題に帰着する。

母を失った少年の苦悩は、母親を失った少年の自我意識の問題である。しかし、少年の母親はもう帰らない。生ある者は死す。我々はそういういのちを生きている。非情なようだが、現実はそのみだけである。しかし、「現実はそのみであって、しかもけってそれだけではない」。私は昨年、一年間の学院生活をとおして、そのことを体験的に学んだような気がする。(学院;大谷専修学院)

少年の悲しみは、少年の悲しみであるままに、実は生死一如のいのちの悲しみであることを、仏典は「如来大悲」という言葉で教えている。そのいのちは、死んでいった母親をも、一人残された少年をも、同じように生かしているいのちである。信国先生の教えに従えば、そのいのちの奥の奥から、命を愛惜し私有化してやまない我われの自我意識を排除して、「命はわがものなり」と名のり出てくるものがある。その声を聞き、その声を思い起こし、その声を口にすること、それが念仏申すことだという。それ故に、念仏申すことを通して本来のいのちに帰っていくとき、少年も必ずそこで、母親との再会を果たすことができる。俱会一処(くえいっしょ)とは、そういう事実を示す言葉ではないだろうか。

福島原発の強制避難区域にいて、霞ヶ浦文化体育館に避難してきた酪農家は、避難を余儀なくされて、「牛といっしょに死なせてくれ」とまで言ったという。同じような思いを持った人に、松川浦の海鮮市場でも出会った。そこも壊滅的被害を受けていたが、年配のその魚師は、これからどうするかという問いに、即座に「また海さ出る」と言い切った。「生まれたときか海と一緒に生きてきたんだ。海がなければ生きられねえ」と言うのだった。

生死を切り離すことができないように、身と土、自分と自分がそこで生きる環境も、切り離すことはできない。海は決して狂暴だけではない。ふだんは、海産資源をもたらす恵みの海でもある。その海は穏やかに凪ぐ日もあれば、津波となって襲いかかる日もある。大魚の時もあれば、さっぱり獲れない時もある。そういう海と共に、事実人々は生きてきたのである。

宮古市田老地区に住む荒谷アイさんは、1933年の昭和大津波で家族7人を失い、孤児となった。今回は、高台の老人ホームでデイサービスを受けていて、難を逃れた。しかし、これからはずっと田老に住みたいという。「友人や知人が沢山いるし、昭和の津波で死んだ家族のお墓も守らなければならない。津波が来たら、また山さ逃げればいい」(毎日新聞)と話している。

ここに身土不二(一如)のいのちを生きる人々の事実がある。三ヶ月を過ぎても、まだ9万人の避難所生活が続いている。国の復興支援は厚くなされなければならない。職住分離も必要だろう。より堅固な防波堤も築くべきだ。原発も抜本的見直しお迫られている。だが、我われは、自然と歴史と社会の交錯する中で、宿業因縁の身を生きるものである。想定外の出来事は、これから、いつでもどこでも繰り返して起ころう。大事なことは、それを全部引き受けて生きることができるかどうかである。生死一如・身土一如のいのちを生きながら、そのいのちの奥の奥から届いてくる願いを聞くことができるかどうかである。

地震を予知したり放射線を防ぐ力は、もとより念仏にはない。しかし、何ごとが起ころうとも、その現実を引き受けて生きる力を、我われは念仏からいただくのだと思う。そこに念仏の力があるのではなからうか。

「大地に依って倒れ、大地に依って立つ」

4月25日の歎異抄講義で、弧野院長は、江戸時代の大谷派講師円乗院宣明の「大地に依って倒れ、大地に依って立つ」という言葉を紹介し、「本願の大地があるからこそ、そこからもう一度、二度三度、百度千度と、幾度倒れようとも、また立ち上がっていくことができるのです。自分の二の足で、この大地の上に立って歩きはじめる。そのような人間の自覚を与えるのが仏教です。」と付け加えられた。それは被災者へのメッセージとして語られた言葉ではないが、私はそこにこそ本当の意味での震災復興の鍵が隠されているように思われてならなかった。

資料22.「人生の目標」塩沢俊一

資料23 ; みな同じ道を歩んでいる(佐々木閑(しずか)、花園大學教授)

…前略… 従来は宗教が、死の恐怖を乗り越えるよりどころとしての役割を果たしてきました。「天国」や「極楽浄土」といった死後の世界を、当たり前のもので自然に受け入れる社会があったからですが、今は違います。合理性を土台とする科学的な世界観が普及し、「天国がある」などと言われても、心から信じ切ることができない人が大半でしょう。だから「死後には何も残らない」という恐怖に一人で直面しなければならないのです。現代は、長い人生を謳歌できる一方、老いて「死」を意識しながら長い時間を生きる、辛い時代にもなりました。…中略…

死に向かう一人ひとりの歩みは孤独ですが、大事なものは「みな同じ道を歩んでいる」こと。今後は、いかに生き、死ぬかという問題を語り合う「組織」が必要になるでしょう。……中略……

死を予測し、恐れる心がなかったら、人間は一切の文化を失ってしまう。死を意識し、死と向き合う中で、生きている意識を見出す。そこに本当の長寿の価値があると思います。(読売新聞、2009、12、18長寿革命、第4部「死生観」総集編より)

資料24 ; 恩の世界、(ある僧侶の言葉、)同朋新聞より2009/11/1(益田恵真)

現在のお寺に入って間もない頃、恩師である藤代聰磨(としまろ)先生から「南無阿弥陀仏を一生かかって学ぶのです。あせらず怠らず念仏と対話して思索することが大事ですよ」というお言葉をいただいた。金言として銘記している。自分で称えて自分で聞く。この単純な反復行為を通して確認された自身、その身を通してしか宗祖の思索には近づけない。そのように私は師の教えを聞いた。

宗祖が語られる恩は決して世間的な意味の恩顧ではない。私たちはふつつ自分に利益をもたらす人やものに対してのみ恩義を感じる。この身と心をたのみにする心によってまわりを餌(えさ)にしてきたからである。それを知って念仏に帰依する主体に与えられる世界を宗祖は功德大宝海と称讃される。それは目の前が念仏を勧める行の世界に転じたすがたである。愛憎の対象でしかなかった人間も、禍福の経験も、全てが主体に念仏をすすめる行の象徴になるというのであろう。念仏が大行といわれるのは、諸仏が有縁の人間となって主体に念仏をすすめているという具体的な事実をさしていわれるのである。行とは自然と社会への関与の仕方であると師は教えられた。

主体が諸仏のすすめる称名を受けとるとき、この世界は善悪の世界から本願海に転じ、眼の前は久遠劫来の恩徳の世界となる。その一生は善悪の自心に迷って流転を繰り返してきた長い歴史の終わる最後の生として荘厳される。そのことを感謝し喜ぶ者が念仏を相続するのである。

宗祖が語られる恩は、現世の「生かされていること」の恩恵を観念して強調する説とは無縁である。師の遺(のこ)された最後の言葉は「私は南無阿弥陀仏になります」であった。師は六字の名号となって念仏をすすめておられる。私たちの助かる道筋は既につけられている。その恩ははかりしれない。(長崎教区、法恩寺住職)

資料25 ; 「思案の頂上」……御一代記聞書、241 条より

我われは、眼の前の苦しみから早く逃れることばかり考えて、「勤苦」の本を抜こうなどと決して思わない。そんな苦悩の衆生を等しく浄土に往生させるためにはどうしたらよいか、どんなに優れた世界があるといっても、そこに至る

(生まれる)ための具体的な方法が分からない限りそれは絵に描いた餅である。

具体的な方法が一番難しい問題である。おそらく法蔵菩薩の五劫思惟の大半はこの難題を解くためのものだったに違いない。仏法(真実)に叛(そ)く心を持ってしか仏法を求めることの出来ない衆生に、どうしたら仏法を届けることができるのか。その難問に対する唯一の答えが、仏法そのものを本願として現し、さらにその本願を、「南無阿弥陀仏」という名号として、その名号を衆生に与えることだったのである。それを受け取る方法は、すでに名号と出遇った人々の讃嘆を聞くことである。

端的に言えば仏が「名」となったのである。阿弥陀仏(本願)が「南無阿弥陀仏」という名となることによって、衆生は仏の本願を憶念することができ、さらに衆生を呼び覚ます仏の声(号)として聞けるようになった。つまり本願が衆生の上に信心(自覚)となる道を開いたのである。まことに「思案の頂上」というべきはこのことである。

資料26 ;「後生」 蓮如上人は、私たちが人間界に生を受けるのは大変まれなことである、しかし、「人間はただゆめまぼろしのあいだのことなり、後生こそまことに永生(えいしょう)の楽果」である、「後生こそ一大事なりとおもいて」「他力の信心をえて浄土の往生を遂げんとおもうべきなり」と示されています。そしてこの他力の信心を獲得するとは「南無阿弥陀仏のすがたをこころうる」ことであり、「南無と帰命する一念」が肝要であるとお教えています。

すなわちこれを、「常に信の初一念に立て」といわれています。これが本願の成就であり、出世の本懐であります。これが後生の一大事であります。

「後生」は蓮如上人によれば永生の楽果、すなわち阿弥陀仏の浄土ですが、「仏説無量寿経」下巻の「雖一世勤苦須臾之間、後生無量寿仏国快樂無極。(真聖全一の三五)」、一世の勤苦(ごんく)は須臾(しゅゆ、注)の間なりといえども、後には無量寿仏の国に生じ、快樂(けらく)極まりなし、とあり、この後生は、現生を終えて後に浄土に生まれること、往生をとぐることである。(注:しゅゆ【須臾】短い時間。しばらくの間。ほんの少しの間。「—も忘れず」「—の命」)

なおまた、「後生」には「最後生身(しょうしん)」と言う意味がある。久遠劫来今日まで迷いを重ねてきた我が身ですが、この人生をもって流転の最後とする。迷いおさめとするという願いにより、この世に誕生した我が身である。

「後生」には「背後生(はいごしょう)」ということがあり、今ここに現存するわが身のいのちの背後の歴史です。親鸞聖人は「たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」といわれていますが、背後生とは「宿縁」でありましょう。

本願成就の信の一念を親鸞聖人は、前念と御念に分けて、「本願を信受するは、前年命終なり。即得往生は、後念即生なり。」とお教えくださって、真実の信心は「死して生きる」ということ、これまでの旧(ふる)き人生に決別して、これからの新しい人生に生きるものとなること、自力迷妄(めいもう)の流転の人生に終わりを告げ、如来本願に生かされて生きる人生をたまるのである。

資料 27 ;小川三夫(宮大工、西岡常一棟梁の弟子)(不揃いの木を組む)より

物を造るということは、形として現われ残るわけです。この世に出て来るわけです。だから物を造る者は、いま思える限りのことを精一杯やっておかなければいけないのです。下手は下手なりでもいい、できる限りのことを精一杯やっておくことです。

なぜかと言うと、次の世代の人のために嘘偽りのないものを残しておかないといけないということです。自分自身に言い聞かせて、嘘偽りのないものを精一杯やっておけば、建物が何百年か後に解体される時、平成の大工はこういう苦勞、こういう工夫をしてあったのだと、それを読み取ってくれる人が現れてくると思います。そういう人のために嘘偽りのないものを残しておかなければいけないということです。

法隆寺では昭和9年(1936)から20年ほど大修理が行われました。その時に西岡櫓光(ならみつ)棟梁を初め、現場の人たちが千三百年前の工人たちと対話をするのができたから、昭和の時代に千三百年前の姿が甦ったのでしょう。千三百年前の造りが今まで脈々と伝えられてきたわけではないのですよ。その間は途絶えています。途絶えているのですが、千三百年前の建物があつた。それを見て、そこで千三百年前の工人の考えが解つたから、昭和に復元ができたということでしょう。

本物はいつの世でも変わることなく人の心を打つものだと思います。私たちは西岡棟梁から仕事(物を造る)を学んだ。そして今は弟子に仕事を教えている。しかし、それは引き継ぎでも伝統でもない。そんなものは関係ないのですよ。

棟梁と私の間でいろいろな建物を造りました。私と弟子の間にいろいろな建物を造っております。それが嘘偽りのないものであれば、自分たちはそれでいいと思っております。ただ嘘偽りなく一生懸命にやっておきさえすれば、何百年か経つた後でも、それを見て、平成の大工さんの考えを解つてくれると思うのです。「仏智に遇う」りゅうこくブックスNo. 120,p97-118、2008年1月龍大成入式の記念講演

資料28 : 預言;

曾我量深先生が「預言とは、預言とは」と言って預言ということをおうとされたがなかなか言葉が出てこなくて、最後に顔を真っ赤にされて「預言とは、着々として歩むことである」といわれた、と聞きました。

資料 29 ;金子大栄先生の遺教を聞く身に具体的な責任の重さを痛感;(広瀬 果)

1976年(S51年)10月6日夜、95年のご生涯を尽くして語られた最後の言葉:

「やあどうも、こんなふうになりましたなあ……。ずいぶんと永い間、生きさせてもらって、思い残すことはなにもありませんわ。でも何かこう……。気がついてみたら、こんな心にさせてもらっていたというのが、実感であります。おかげでやるだけのことはやらせてもらうた、ということ喜んでおります。まあ、これが自然の死、とでもいうことでしょうかなあ……。でもねえ、まだ生きとるんだから、いろいろとやりたいと思ひ、聞いてもらいたいということもありそうだが、今は、なにもない。死んでいくということは、こんなもんかなあ……。そう思う程度であります。

それでねえ、何か言おうということになると、もう、ただ有り難うございます……。自分の気持ちとしては、素直に、これだけを言うよりはほかにありませんなあ……。もうすこし言わせてもらえば、お念仏は有り難いすなあ……。ほんとうに…。有り難うございます。有り難うございました。

どうぞ、あなた方も、無理をせぬように、よろしく、お願いいたします…。まだ生きとる間は、心いくまで、有り難うございます。と、ただ、これだけを、申し上げたいばかりであります。有り難うございます……。」

「南御堂」第566号、2009年(H21年)10月1日、金子大栄師を思う

資料30;死んだ人を悼(いた)むのではなく、「生きた」ということを悼む

……「死んだ」ということから「生きた」という転換がすごく大事ですね。その人は死んだんだと死人として見るのではなくて、その人は「生きたのだ」と。その人の一生を生きた。そう転換することによって、……
……、大切な人を亡くしても、その人は生きたんだということと出会うことが本来の悼みとなる。……

資料31 ;衆生所楽願 一切能満足 (浄土論、願生偈)、本多弘之

「浄土一濁世を超えて、濁世に立つ」信ずるということは、眼(まなこ)の転換 親鸞仏教センター所長 本多弘之
信心という問題

『浄土論』に、「衆生所願樂(しゅじょうじょがんぎょう) 一切能満足(いっさいのうまんぞく)(衆生の願樂するところ、一切よく満足す)」とあって、「一切所求(しよく)満足功德」と呼ばれています。「願」も「樂」も願うことで、衆生が願う一切が満足する場所が浄土であると。実際には、われわれは、全然満足していないではないかと。絶対満足などあるはずがないと思っている、欲の骨頂であるような人間に、「一切所求満足」などと言っても、そんな話は虚偽だと。あるいは、理想の話などしたってしょうがない、もうちょっと身近な話を、というふうにはしか見えないでしょう。

曇鸞は、「称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざるはいかん」(『浄土論註』)という問いを出しています。無碍光如来、阿弥陀仏の名(みな)を 称えても、相変わらず自分自身は無明(むみょう)であり、願いが満たされていない。しかし、それは名号の責任、如来の責任ではない。衆生の側に責任がある、と曇鸞は言います。どういう責任かというときに、信心の問題だと言うのです。

信心という問題はやっかいで、なかなかわからないのですけれども、悟りということが、仏教一般を成り立たせてきた一つの大きな言葉であるし、目標である。そういう、悟りというものが中心の宗教とは、現世に、自分の体験内に、無限と一つとなる体験をもつということです。ところが、悩み多き、欲多き、しがらみ多き生活をしながら、そういう体験をもつことは、ほとんど不可能である。

それに対して、親鸞という人は、愚かであり、流転(るてん)の生活をしていくしかないような人間、その人間が、本願によって、そこに、その生活のままに、悟りと同じ利益(りやく)を得ると。だが、それは悟りではない。それを言い表す言葉は、言うならば、ないのだらうと思うのですが、それを、「聞其名号(もんごみょうごう) 信心歡喜(かんぎ)」という『無量寿経』の言葉、つまり、「信心歡喜」という言葉のなかに見いだした。

臨終まっぺからず

ところが仏陀は、そういうものに依らない智慧というものを開くために苦勞された。そういう智慧は、一切衆生がその法に依って、その道理、真理に依ってたすかるものだと宣言された。それを、親鸞は求め求めて、本願の仏教で本当に出遇(であ)った。たすからない人間であるということをも、骨身に浸みて知っていて、しかも、たすかるという道を親鸞という人は発見した。これは、すごいことだと思うのです。

ではそれを、どういうふうに表示していくのかというときに、おそらく親鸞聖人も随分苦勞されたと思うのです。言い過ぎれば、

誤解される。言わなければ、せつかく本願に触れた喜びというものが伝わらない。せつかく飲んでいのに、“やはり、救いは死んでから後か”というような話になったら、何のために、いま出遇っているのだと。いま念仏しておいて、貯めておいて、臨終に役立つぞというような、そんな根性で称えているのかと。そうではないのです。

親鸞聖人が、一念一念信心歓喜しているということは、その信心歓喜に救いがあるのです。その救いの意味は、「回向(えこう)」でしょう。如来回向。如来が来てくださるのだと。無限は、有限の外にあるように見えるけれど、外ではない。有限を包んで、ここにはたらいっているのだということが、回向ということです。

その構造が難しいですね。眞実信心と大涅槃のさとりととは、直に接している。接しているけれど、取り込んではいないという関係で、いまを飲んでいけるということをどういふに言えるのか。ここを、親鸞聖人は、分限を押さえながら、しかし、あまり遠慮せずに積極的に言おうと。浄土教と言えば、死んでから後だといふに思われているけれど、救いは死んでから後ではない。救いは現在にあり、臨終まつべからず(「臨終の称念をまつべからず」『尊号眞像銘 文』)、臨終が勝負だという宗教ではないのだと。

いま、たすかったのならば、いま、お前は仏かと。そういう意味ではない。仏ではない。けれども、仏になる資格はあるのだと言うのです。資格があればそれでよい。仏になるとがんばらなくても、もうよいのだと。愚かで罪深い、哀しい身であるけれど、そのままに、無限なる慈悲が、ここにはたらいてきているという事実をいただいでいけばよいと。

これが、清沢満之先生の次の言葉(「臘扇記(ろうせんき)」)にもよく出ています。「請(こう)勿(なか)れ、求むる勿れ、汝(なんじ)何の不足かある。若(もし)不足ありと思わば是れ汝の不信にあらずや」と。こう言わざるを得ないのは、やはり、欲しい、求めるという心が湧いてくるからです。けれども、それを「不信」と言っているのです。如来に対する絶対の信頼がないと。それは、如来に対しての反逆ではないかと。けれども、如来は衆生のそういう反逆も罪も、全部許そうと。しかし、「汝の苦惱を如何(いかんせん)」。そうやって、一人でもがいているものを救うことはできないよと。勝手にもがいているのだよと。こういう表現です。

信ずるということは、眼(まなこ)の転換を言っているのです。私どもの発想の転換です。だから、こちらから信ずるのではない。如来回向の信心だと。如来から信じられていると。如来から与えられているということに、顔(うなず)くしかない。どういう状況だからだめだとか、どういう状況なら良いという話ではなくて、どういう状況であろうとも、状況を否定媒介にしながら、絶対満足をそこにいただくという、そういう智慧が、本願の智慧として教えられているのではないかと思うのです。(文責:親鸞仏教センター)

資料32 ;航海日誌 (多田野 弘のエッセイ)

資料33 ;紫雲寺 いま、ここに (2001年11月11日 紫雲寺、報恩講法話)

資料11 ; 羽田信夫先生の講義録(土曜会通信)

浄土真宗の根本經典仏説無量壽經(大經)です。親鸞聖人がそのように言われたのはこの經典に本願を説かれているからです。大經には、国王であった人が、一人の仏に出会い感動して、仏になる願いを起こし、やがて行をして仏(阿彌陀仏)になるという物語が語られてあります。その本願が「無限なる精進への願い」です。本願はものすごい力を持っているのです。

国王であった人が仏に会って非常に感動した。「先生、貴方のお顔は輝いています。」とか「貴方の智慧は世界を震動させています」と言って師を讃え、私は貴方のようにになりたいという願いをおこします。その願いを述べた後でその願いを成就するための行についての教を請うのです。

その請いに応じて師がその教を与えるという部分が大經にあります。その教はどのような教であるかと言うと、それは「精進せよ」という、それだけがその教です。

『その時世自在王仏、その高明の志願深広なることを知り、すなわち法蔵比丘のために、經を説きて言わく、「たとえば大海を一人升量せんに、劫數を経歴せば、尚底を窮めてその妙寶を得べきがごとし。人、至心精進に道を求めて止まざることあらば、かならず當に剋果すべし。何れの願いをか得ざらん。』』 『その時師匠の世自在王仏は法蔵の深い願いを知って、彼の為に次の如く教を説きました。「たとえば一人の人が大海の水を升で汲み干そうとして果てしない時をかけてそれを続けるなら、遂には底まで汲み干して海底に有る素晴らしい寶物を得ることが出来るであろう。そのように人が真心をこめて道を求めるといふ道精進を止めることがなかったなら、その人は必ずその目的に達するであろう。徹底的に精進する願いがあったならどんな願いも成就しないということはない、必ず成就するのだ。』』と、いう教です。これは「精進せよ」という教。

精進ということは何も法蔵菩薩が知らなかった教ではない。この教を請う前に師を讃える言葉(讚仏偈)の中で法蔵菩薩は私はあなたのようにになりたい、そのために私は精進してまいりましょうと何度も言っている。

「假令身止 諸苦毒中 我行精進 忍終不悔」と。たとえ地獄のような所へ落ちて私も法蔵菩薩の精進してまいりましょうというのが法蔵菩薩の願いです。精進ということは何も知らなかったことではない。その法蔵に対して師は「精進あるだけだ」と言うことを教えているわけです。

先生と言うのは新しいことを教えないのです。私たちは大切な事を既に知っているのですが、その重要性を十分に知らないのを「これが本当に大事なのだ」と言って教えて下さるのが真の先生です。

法蔵菩薩という人がどういう人かということはこの精進の教が決定しているわけです。法蔵菩薩の人となりというのはこの教えなのです。この教えこそが法蔵菩薩です。精進が法蔵菩薩なのです。この教えを頂いた後で法蔵菩薩は願を建てたり修行をして仏になるのです。けれども、この精進ということが法蔵菩薩のお心の核心になるのです。ですからここで法蔵菩薩がこの教えを頂いたということは非常に大事な意味を持つのです。この教えだけがあればいいんです。そういう教えです。

「必ず寶物を得ることが出来るだろう」と書いてあります。道で寶物を得るといふことはどういうことなのか、ということ。精進していったら必ず寶物を得ることが出来ると言うけれども、一体寶物を得るとはどういうことなのだろうか。寶物と言いますと我々は勝手に色々な物を考えます。

私達は普通、道を求めて行って、あるところまで行ったら寶物を得ると考える。精進を寶物という目的を得るための手段と考える。精進は寶物に行くまでの過程と考えると、私達は過程を経てこの過程の向こうに寶物があると考えます。今は無いけれども、今無い寶物が向こうに行ったら見つかるというふうに考える。

仏教の寶物というのは、そういう寶物ではない。寶物というのは過程の中にあると教えるのが仏教なのです。これは大事な事なのです。

「ロシアの民話」

『昔々、ある山村に父親と三人の息子が住んでおりました。父親は大變年をとり死期が近づいたことを知ります。そこである日、三人の息子に自分の臨終の床へ来ることを命じました。そして次のように語りました。「息子達よ、わしは壽命が尽きて余命幾許もない。だから今死ぬ前に一つお前たちに言い残したい事がある。それはわしらの畑の中に素晴らしい寶物が埋まっているという事だ。わしが世を去ったらお前達はこの素晴らしい寶物を発見して欲しいのだ。お前たちが一生懸命に探したら、必ずやお前たちはその寶物を発見することが出来るだろう。」そう言って父親は息をひきとりました。

さてその父親の言葉を聞いた三人の息子たちは葬儀を済まして、すぐに畑に出て行って鍬で土を掘って、一生懸命寶物を探し始めました。彼らは金貨とか、寶石があると思っていました。ところが金貨とか寶石のような寶物一つも見つかりませんでした。しかしその時季節は春だったので掘り起こしたままではもったいないと、掘った後に種を蒔いておきました。そのようにして三人息子は春から秋にかけて一生懸命寶物を探して土を掘ったわけです。しかし寶物は見つかりませんでした。しかし秋になると春に蒔いた種からたくさんの作物が収穫できたのでした。そして冬になりました。

冬の或る日、三人の息子たちは炉端に座って、父親の最後の言葉について語り合いました。一番下の息子が言いました。「一体親父は俺たちに嘘をついたのだろうか。確かに親父は畑の中に寶物があると言った。しかし俺たちは一生懸命一年間寶物を探し求めたけれども、金貨一枚もみつからなかった。一体親父は俺たちに嘘を言ったのだろうか。」と。それを聞いた長

男が急に立ちあがって叫びました。「いや親父は嘘はつかなかったんだ。親父の言ったことは正しかったんだ。親父は本当に宝物があると信じて、それを俺たちに伝えたんだ。宝は実際にあったんだ。親父は俺たちが既に持っている宝物を発見してほしいということを言ったのだ。それを我々は誤解して宝物というのは金貨とか宝石だと考えたのだ。宝は既にあったんだ。」これを聞いた他の二人の息子は驚いて、「兄貴一体何を言っているんだ。お前は宝をもう見つけたと言うのか。」と言いました。そうすると長男は答えて、「俺たちは宝物と聞いた時すぐそれが金貨とか宝石だと思ったけれども、そうじゃないんだ。親父は宝物と言った時、畑で働く事が宝物だということを言いたかったのだ。親父は俺たちが土を掘り、土地を耕すことが何よりも尊い宝物であるということを言いたかったのだ。その宝物を俺達が発見することを親父は願っていたんだ。それを我々は誤解して金貨のような物が宝物だと思っていたのだ。親父は俺たちが既に持っている宝物を発見して欲しいと願っていたんだ。」これを聞いた二人の息子は、「そうだ、その通りだ。親父の言っていた宝物というのは、俺たちが畑で働くという意味だったんだ。」と言いました。

そしてその日から三人の息子は金貨のような宝物を求めるのを止めて、畑で働く事、ひと鍬、ひと鍬、畑を耕す事が何よりも尊い宝物であると考えようになりました。』

この話は法蔵菩薩にお師匠さんが、「お前一生懸命宝物を探していったら、必ず宝物を得る事ができる。」と言った意味を説明してくれているわけです。

三人の息子は、畑を耕すという手段、過程の向こうに宝物があると思って、その手段、過程を使って、今持っていない宝物が向こうにあると思って、それを得ようとして努力していたわけです。しかしそれは非常に浅い考えです。それが父親の本当の願いではなかったのです。そしてついに、三人の息子たちは本当の宝物というのは、既に持っているものだということに気付いたわけです。この畑を耕すというプロセスこそが宝物だと、これ以外に尊いものはなかったと気付いた訳です。それに気付く迄はその向こうに宝物が有ると思っていた。夢をみていたわけです。私たちが仏教を学ぶ時も同じ間違いをおかします。

私たちは信心とか悟りとかと聞くと、聞法精進していったらそういうものが得られると思っているわけです。聞法精進は手段だと思っている。目的を果たす過程、手段だと思っている。そのように考えるのは非常に浅い考えです。私たちは皆最初そのような間違いをおかします。みんな仏教を学んだら素晴らしい人になれるとか、信心を頂けるとか、悟りを得られると思う。

だからこの三人の息子たちが目覚めたように、仏道においても私たちにとって、本当の宝物は求道精進ということであり、それ以上に素晴らしいものは無いということに目覚めなければいけないのです。プロセスが宝物なのです。聞法精進していったらご信心が頂けるのですか。聞法精進以外にご信心は無いのですよ。自分にないものを得たい、自分がそれでないものに成りたい、幸せな人間になりたい、心の静かな人間になりたい、悩みや不安のない人間になりたい、と言いますが、骨の髄から不安や煩悩の塊の我々がそのような人間に成れる訳はない。

供養諸仏

供養とは大無量寿経では、聴聞する、聞法精進する、よき師の所へ行って教えを聞いて学び続けるという意味です。先生の所へ行って法を聞いて学び続けるというのが供養諸仏。

供養と言うのは何かを差しあげるとい意味ですが、差しあげるのは自分の心を差しあげるわけです。聞きたいという気持ちを差しあげる。それに師が答えてくださる。弟子が色々な物を差しあげられるのですが、物よりも私が聴聞したいという心を差しあげるのが一番先生が喜ばれることです。

師の所へ行って聴聞する。これは非常に大事な事です。法蔵菩薩はこの供養諸仏の人です。そしてこの供養諸仏というのが、どんどん激しくなっていく先生の数が増えていく。どんどん学びが深まっていく。

親鸞聖人は法蔵菩薩は諸仏から智慧を頂くとされています。この智慧を浄土真宗では光という。最初は頂く光つまり智慧はわずかだけれど、供養諸仏の修行によって、多くの先生を見出して、その多くの先生から智慧を頂く、その光はどんどん大きくなる。願を成就した法蔵菩薩の名前を無量光すなわち無限の光と言う、この「無限の光」を親鸞聖人は、法蔵菩薩が色々な先生方から智慧を集めたかたちだと言う。だからどんどん光が大きくなって、学びたいという心がどんどん深くなる。ですから「諸仏の智慧を集めたる御かたちなり」と親鸞聖人はおっしゃるのです。

分かりやすい喩えで言いますと「蛍の光、窓の雪」と言いますが、昔、貧乏学生がランプを買うお金がないので、蛍を捕まえて蛍の光でランプを作ろうとしました。しかし百匹や二百匹では駄目です。法蔵菩薩の場合はもっとスケールが大きい。ガンジス河の砂程の仏さまから光を、智慧を頂こうとしたわけです。これは蛍集め、光集めです。蛍の光でも何億何兆と集めたらすごい光になるでしょう。法蔵の修行というのは、気の遠くなるような話ですけど、法蔵菩薩の修行というのはそのように多くの先生からの光集めなんです。

「無限なる精進への願い」というどこまでも学んでいきたいという願いがどんどん大きくなっていく。

そしてこの法蔵のあつめる智慧というのは何かというと私たちの人間の知恵ではないのです。人間の知恵というのは必ず二つに分ける知恵なのです。プラスとマイナスというように。きれいな物はいいけど汚い物は嫌だ。幸せはいいけれども不幸は嫌だ。健康はいいけれども病気は嫌だ。生きる事はいいけれども、死ぬ事は嫌だ。そのようにみんな二つに分けてしまう。そ

のように人間の知恵というのはプラスとマイナスに分ける。それを分別という。このような分ける知恵を、二つに分けるので二元分別と言います。これはいいけどそれは駄目というのは人間の知恵です。

法蔵菩薩は国王であった最初はそういう知恵しか持っていませんでしたが仏に会って仏の智慧を頂いた。仏の智慧というのは無分別智と言って、分別しない、二つに分けない智慧です。すべてに意味を見出す智慧です。プラスにも意味があるけれどもマイナスにも意味があるという、これが無分別智です。金持ちでもいいけれど、貧しくなったら貧しくなっただ、何かそこに教えを頂く。健康もいいけど病気になったら病気になったで、また死ぬ時が来たら死ぬということで、人生にとって無意味なものは全くない。人生にある全てです、幸も不幸も、色々な良き事も悪き事も、喜怒哀楽も、全部が私にとって何かを教えて下さる意味があるものだと思える、そういうのを転成の智慧と言うのです。転成ということはマイナスが転じてプラスに成る。悪が転じて善と成る。その智慧が転成の智慧と言われるのです。或いは摂取不捨の智慧と言います。摂取不捨というのは、人生に有るものすべてを頂いていこう。みんな教えを頂けるものなんだ。切り捨てる物は何も無い。これが摂取不捨ですね。そういう智慧です。

法蔵は人生で会うすべての人から学んでゆく。今まであんな奴から何一つ学ぶ事はないと軽蔑していた人からも、なにか自分の中にあるいやなものを見せられているように思い学ぶことが出来る。あんなケチな男がいるものかと思っても、自分の中に同じケチ根性があるからこそ、あいつはケチだと分かるのです。私の心にも同じものがあるから響き合っているのです。ケチな人は何処に行ってもケチな人をすぐ見つける。自分がケチだから、ケチな人はすぐケチな人を見つかる。優しい人はケチな人がケチなやつだと思える人を見ても、ああいい人だなあ、ああいい人ばかりだなあ、みんな気前のいい人ばかりだなあ、と見る。その人はケチな根性じゃないからです。ケチな根性があればすぐにケチな根性の人を見つかる。ですから人を見て、ケチな人だな、いやな人だなあ、と思ったら、それは相手の中に自分を見ているという事なんです。その人が自分の姿を見せているのです。そのように考えてみれば私の人生で会う人はみんな私の鏡です。言い代えたら、私の中の何かを見せてくれている先生です。

そう言う事が供養諸仏ということ。諸仏だから、仏様だからと言って、立派な人、偉い人、智慧のある人だけとは限らないですよ。智慧の無い人でも、愚かな人でも、みんな私たちの見方では諸仏です。私たちに智慧を与えて下さる、私たちを見せて下さるという意味で諸仏なのです。何も智慧のある人、悟った人だけが諸仏ではない。私たちがどのような人も諸仏と見れるようになるということです。なにも客観的に素晴らしい諸仏がいるということではありません。私たちの頭が下がってきたら、どのような人も尊い教えを与えてくれるありがたい人と見れるようになるということです。私たち個人個人が或る人を仏と仰ぐと言うことで、誰もがその人を仏と見るということではありません。私たちのものの見方が世界をつくっている訳です。

そういうことで自分の姿を見ていくわけです。供養諸仏というのは毎日の生活です。諸仏から学ぶということは日常生活が聞法精進の場となるということです。何も特別なこういう学習の場所に来る事だけが仏法ではなくて、日常、社会で出会う人たち、或いはテレビで見る犯罪者とか、そういうものがみな諸仏になるのです。

そういう事で供養諸仏ということは法蔵菩薩の存在全体が、生活全体が、学びになったという事です。それが阿弥陀仏に成ったということです。阿弥陀仏というのは無量光仏というのです。無限の光の仏という名前ですが、本願が本当の本願になった(成就した)時の名前です。もう法蔵菩薩は無限に智慧を求め続ける人になったという意味。無限というのは終わりが無いという事です。無限にどこまでも学んでまいりましょうという、智慧を学んでいきましょうという名なのです。法蔵にそういう名前が与えられたという事が本願が成就したという意味なのです。

親鸞聖人は「弟子一人も持たず候。」と言われました。私は先生じゃない、私が弟子なのです、私は学生です、私には弟子はいない、先生じゃない、と言うのが親鸞聖人です。これは正に法蔵菩薩のお心を頂いているわけです。法蔵が仏になったというのは、本当の初心が完成したという意味です。求道者の質が変わって先生になって、救う側にまわるというようなのは本当の阿弥陀仏ではない。ところが観無量寿経の阿弥陀仏はそういう救済者としての阿弥陀仏なのです。人を救おうとして韋提希の前に現れるとか、そういう上から人を救ってやろうという、そういう仏は親鸞聖人は化仏だと言います。それは方便としてそういう化仏としての仏をたてるけれども、本当の阿弥陀仏というのは智慧なのです。本当の阿弥陀仏は智慧をどこまでも、どこまでも求めていこうという求道者あるいは求道心であって、決して救済者ではないのです。多くの人が阿弥陀仏を救済者だと思っている。しかし私達は救済者によって救われるのではなく、この本願(求道者の心)の力を頂いた時に救われるのです。私たちが求道者になって同じ流れに預かるのです。それが本当の救いで、後者の求道者が無限の求道者となるこれが本当の仏様です。みんな前者の求道者が救済者となる仏様を考えて、私達の外から神様みたいな阿弥陀仏が来て私達を救って下さると考えている。それは親鸞聖人が言われる阿弥陀仏ではないのです。阿弥陀仏は智慧なのです。無限の智慧です。これは非常に大事なことです。一般の人たちが普通考えている阿弥陀仏はみんな神さまです。そんなものは親鸞聖人が教えて下さっている阿弥陀仏ではないのです。

願いは「無限なる精進への願い」です。願(因)の質が変わらずそのまま完全な願(果)になるのです。願が即願成就であると言われるのはそういう意味なのです。

この願いが大無量寿経で説かれて、この本願が震源地なのです。この精進への願いから諸仏が生まれてきている。諸仏はすなわち釈尊も、七高僧も、親鸞聖人もみんなこの願いで救われて、この願いを体現しているのです。

この無量光という名の意味を知らなければいけないのです。これを名号のおいわれという。名号に、名前に意味がある。阿弥陀様という救済者が来て私達を救って下さるというような意味ではない。名前の意味を、言葉の意味を分からなければいけないのです。浄土真宗の御本尊は言葉なのです。人の形、仏さまの形を使わないのです。使ったら救済者になってしまう。言葉が私達の御本尊です。仏像より絵像、絵像より六字名号なのです。言葉が大切なのです。言葉が何故大切かという意味があるからです。阿弥陀仏という言葉の意味は「無限なる智慧」という意味です。「無限なる智慧を求め心」という意味です。この意味を聞かなければいけないのです。「仏願の生起本末を聞いて疑心あることなし、是を聞というなり。」です。仏願の生起本末というのは、「本」は正に願が発起して、その願が行ぜられて、そして「末」というのは成就です。この仏願の始まりと終わり、勿論真ん中の行も入っています。名号の中に法蔵菩薩の行が入っているのです。阿弥陀仏は「無限に智慧を求め続ける行」なのです。このおいわれを聞いたら、そのおいわれを体現した人に出会ったら、それが私達を動かすのです。智慧が私達を動かすのです。

親鸞聖人の教えには神秘的なものは何も無い。南無阿弥陀仏の音が私達を救うとか、南無阿弥陀仏と称える行為が私達を救うとか、それはすべて神秘主義です。親鸞聖人はその名号の意味を聞いて、その意味が私達を救うと言うのです。私達は名義、名号のおいわれという事とことなまで聞いて行かなくてははいけません。これが親鸞聖人の教えです。言葉が、その意味が、私達を救うのです。それを聞いた人がその意味をいただいて、それを体現しているわけです。そして我々にその意味を伝えて下さっているのです。それを体現している先生がいて、その先生に弟子が会って、そのようにして名号の意味が仏の智慧が次の世代へ次の世代へと伝えられてきたわけです。ある浄土真宗のお寺の掲示板に詩が書いてありました。それは次のような詩でした。

蛇口をひねると すぐに新鮮な水が出てくるのが 不思議でならない

これを見て僕は素晴らしい事が書いてあるなあと思ったのです。これを書いた人は浄土真宗の詩人ですね。僕はこの詩を見た時、この詩人は善知識に会った人なのだなとすぐ思いました。蛇口をひねるとというのは善知識に会うということなのです。この詩人は自分が善知識に会ったその喜びを歌っているのです。蛇口をひねるだけで新鮮な水が出て来るというのです、新鮮な水というのは素晴らしい教えのことです。名号と言ってもいいし、本願と言ってもいいし、真理の法と言ってもいい。仏の智慧と言ってもいい。蛇口をひねるだけで、水源地からずっと幾つも数えきれないパイプラインによって伝えられてきた、その新鮮な水が出て来る。素晴らしい法はもうすぐそこまで来ているのです。私たちの顔前まで来ているのです。必要な事は蛇口をひねるだけなのです。多くの人が蛇口をひねらないから、その水をいただけないのです。長い歴史において素晴らしい多くの先生方が、素晴らしい新鮮な水を伝えてきて下さっているのです。蛇口をひねるといことは、善知識に会って聴聞するということなのです。もうそこまで善知識が伝えてきているのです。ですからこの詩を見た時、ああ本当に法に会うということは大変簡単なことだが同時に困難な事だなあと思いました。また善知識に会うという事は本当に有難いことなのだなあと思いました。

資料17; 労働観「念仏者の道」、信楽峻磨、法蔵館、2004年

働くというのは、そのままが目標でなければならない。(労働観「念仏者の道」、信楽峻磨、法蔵館、2004年)

戦前生まれの人は「それぞれが、それぞれの分に合った労働、職業をもって、懸命に汗しなければならないといことを、教えられた。そしてそう思ってきた。

現代人は「何のために働いているのかと尋ねられたら、どう答えるか？

様々な社会の仕組みの中で、それなりの地位や職分を得て仕事をしています。それはいったい何のためにやっていると考えるか。自分で生活するためだ。だから少しでも生活を良くするために、あくせくと働いている。

食べる為に働いている。食べていけさえすれば良いということだろうか。

労働とは基本的には、つらく、しんどいことです。キリスト教では、労働とは人間が神に背いた罪の報いによって、死ということと労働ということが罰として与えられたのだとも言っています。「はたらく」という日本語は「はたる」という言葉から生まれたという。「はたる」というのは、ハタハタと身体を動かすということです。労働とは人偏に動くと書いている。分析的には人間が鋤(すき)を引く形を示したものだ。西洋も東洋も働くとは額に汗するしんどいことなのだと理解されている。だから人間は、働かずにご飯が食べられるならば、それが一番楽で、その道を多くの人は選ぶとします。

生業(なりわい)という言葉は、単に食べる為に働く、生きる為に働く、食べる為、生きる為の働き(仕事)を生業(なりわい)いう。もしそれだけならば、すりや泥棒をしていても労働か…………。

「職」という言葉は、職分という、持ち分ということの意味。それぞれの分担という意味。天職という言葉は天から与えられた持ち分、職分ということである。この世に生きているかぎりには、それぞれ自分自身で責任分担をしなければならないというので、それぞれ働くことを「職業」と呼ぶ。

労働はわれわれの人生において、いかなる意味を持っているのか？

資生(ししょう)産業皆な正法(しょうぼう)に順ずれば、皆実相と相違背せず。(法華経)

若しその仕事が仏法の教え(道理)に順ずるならば、まことの道理に順ずるならば、その行為はそのまま仏道である。正しい労働であるならば、それはみんなお浄土まいるの行為であるという考え方です。

仏教は、われわれが正しく社会を生きていくための教えです。「一切世間(いっさいせけん)の治生産業(ちしょうさんごう)は皆実相(じっそう)と相(あい)違背せず。」われわれに与えられた日常の仕事を全うする事が大切です。会社勤めでも、家事でも、子育てでも、その社会的な自分に与えられた責任を果たし、常に前向きに一所懸命努力する姿こそが尊い仏法の示す悟りへの修行なのです。

鈴木正三(江戸時代の初めの僧)

家康の家来、徳川家のために働いた武将、戦乱にて殺生の行為を反省して仏門へ、座禅、そして念仏する浄土教徒になる。彼は労働はお浄土への道であると言っている。彼は南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とお念仏を称えながら、鍬をもって畑を耕すならば、その一鍬一鍬がお浄土への道になるということを言っています。その遠縁は法然上人にある。

法然上人は我々の日暮らしの全てが、朝から晩まで何をしよう、すべて日暮らしが念仏の助業であるといっている。その法語によると「現世のすぐべきようは念仏の申されんように過ごすべし」「衣食住の三は念仏の助業なり」と教えています。「この世の有り様は、ひとえにお念仏を申せるように日暮らしをなささい」(法然)

法然上人の教えは、お念仏をもうして浄土に向かって生きていく、これ以外に私たちの人生の本道はない。私の日々の生活、その行為のすべてがお念仏をもうすための助業、お念仏の一声一声が出てくる助業になるのだといわれる。あとの人生、世の営み、労働までも、みんなその念仏を申すための助業、方便なのだ。結婚さえもそうだと法然上人はおっしゃる。

真宗においては、何事もお念仏を申すことが肝心なのです。ひとえにお浄土に向かった道を生きることが肝心なので、あとの日暮らしは、みなそのための手段なのです、助業なのです。

お浄土への道がまっとうに歩けるならば、何をやってもいいといわれる。これは大変なことと言われたのです。当然そこには、浄土を見透かして生きる身には、それなりのまことの人生が開けてくるはずで。

今まで種々の戒律があった、戒律を守る目的はなんだったのか。その目的が曖昧模糊としていた。だから戒律をまもって修行する人が、あたかも「偉い人」となっていた。目的と手段が逆転していた。念仏して生きるという目的が忘れられて、その手段だけが大切にされていた。そこを法然上人が引っくり返された。私たちの日々の日暮らしの中で、お念仏を申すことができるならば、日暮らしの全部が、お念仏に導かれている浄土の道だといわれる。(………… 往生浄土の縁となる)

浅原才市、「ありがたや 娑婆ですること、家業営みすることが、浄土の莊嚴にこれが変わるぞ」

教行信文類に中国の法照の文が引用されている。「この界に一人いて、仏の名を念ずれば、西方に、すなわち一つの蓮ありて生ず」とある。浄土に往生するということは、すでに出来上がっている所に滑り込むのではない。お浄土の莊嚴は自分で作るのです。お念仏申したら、その声に応じて一つずつ、お浄土に蓮華の花が咲くというのです。

「名号を称えるは、即ち浄土を莊嚴するになる」(尊号真像銘文)

私たちがお浄土を目指してまことに生きていくなれば、私たちのお浄土が、一人ずつのお浄土が、いよいよ美しく飾られていく、完成していくのです。お念仏というのは、そういうものなのですね。尊く有難いことです。

才市は法照や親鸞聖人の言葉は知らなかったであろうが、期せずして同じ事を表現されている。

結論:「働くというのは、そのままが目標でなければならない。」

子どもが遊んでいるのはそのままが目標・目的なのです。自分が自己目的的にやりたいからやっているのです。だから楽しいのです。プロ野球の選手は手段としてやっているのです。

今も、私たちが働くということを、なんらかの意味で自己目的化することができるならば、そのことは現代の時代、社会は、働くことが非常に難しい時代、社会になっていますから、簡単には言い切れませんが、もしも私たちが働くことが、何かの手段、食べるための手段ではなくて、それ自体を自己の人生の目標と捉えることができ、その一つ一つを、自分がやりたいからやっているのだ。そして、それはそのままお浄土への道だという思いを、少しでも持つことができるとするならば、そこに違った労働観が生まれてくるだろうと思います。

労働が金儲けや食べるためだけでない、働くことがそのまま一定の目的を持つ。意味を持つような労働観はないでしょうか。浅原才一さんは、下駄を削りながら、「これは浄土の莊嚴になるぞうれし」と歌っています。そういう働きがいのある日常生活が生まれてくる道はないものでしょうか。

資料 33 ;紫雲寺 いま、ここに (2001年11月11日 紫雲寺、報恩講法話)

人は誰でも、そこそこの年齢になれば、多少なりとも「人生」について考えるものですが、科学万能ともいえる現代社会に生まれ育った私たちは、おのずと科学的な視点から考えようとするものです。しかし、科学的思考というものは、「人生」を考えるうえで、不都合にできているのです。その理由は、科学的思考というものは、あくまで客観的であることを身上としていることです。客観的というのは、そのなかに自分を含めない。つまりは、科学的思考によって得られた知識は、いふならば「私」抜き知識だということです。

ところが、たとえば私が自分の「人生」を考えるという場合、「私」抜き知識では意味がないのです。私が求めているのは、考察の主体でもあり客体でもある私にとってかけがえのない、個としての「自分」そのものについての知識だからですね。科学というのは、もともと存在の仕方を解明するものであって、存在の理由を証すものではない。たとえば、二つの物体の間には、引力という力が働いている。どういう仕方ではたらいっているのかという問いには、「相互の質量の積に比例し、距離の二乗に反比例するという仕方ではたらいっている」と応えられます。しかし、では、何故に、そういう力が存在するのかという問いには、科学は答えられないのです。ところが、私たちが人生の問題にぶつかって口にする問いかけは、ほとんどが「Why」なのです。

「人生」というのは、いわゆる科学的思考の対象ではないのです。

たとえば、皆さんは、朝目覚めたとき、「ああ素晴らしい、今日も生きている」と、お感じになったことがおありでしょうか。生きているのは当たり前すぎて、何も感じておられないのではないのでしょうか。もしそうなら、それは果たして、「生きることを大切にしている人の感覚と言えるのでしょうか。

生きているのが当たり前になっているということは、永遠に死なないかのごとくに生きているということです。つまりは、死ぬことを考えていないということです。私たちは、「当たり前」になっているものを、大切にすることはできませんね。ですから、「生きることを大切にすれば、「死ぬことを考えねばならないのですが、私たちは、そんなことは、できるだけ考えないようにして暮らしている。違いますかね。

「死というものは、避けられない。選択の余地が無いのだから、死について考えるなどという、不愉快な事はしたくない」。もう少し下世話な言葉で申しますとね、「死ぬ時が来たら嫌でも死ぬんだから、今からそんなことをクヨクヨ考えても始まらない。生きている間にしたいことをして、せいぜい楽しく一懸命に 生きた者が勝ちだ」となる。いかがですかね。

私たちはたいいてい、自分の「死」というものを真剣に考えることがありません。考えることがないというよりも、本当は、考えられないのです。何故かと言えば、理由は簡単です。恐ろしいからです。

科学万能とも言える現代社会に生きる私たちは、「目に見える世界が全てだ」と考えているところがあります。しかし、「目に見える世界が全てだ」とすれば、たとえば「私」というのは、この目に見える「身体」のことだということになる。もし、この目に見える「身体」が、「私」の全てだとすれば、当然、「死ねば終わり」ということになります。ところが、この「死ねば終わり」というのは、自分の問題として考えれば、非常に恐ろしいことです。

どれほど豊かな暮らしをしていようと、どれほど世間に認められていようと、どれほど生き甲斐のある生活をしていようと、死ねば、意識がプツンと切れて、それで全ては御破算になる。そんなふうに、「自分」という意識が消滅してしまい、いかなる「人生」をも無意味にしてしまうのが「死」だということであれば、これはちょっと想像するだけでも恐ろしいことです。考えれば考えるほど、恐ろしくなる。そんな恐怖に直面していることは、とても耐えられないものですから、私たちは、必死になって「死」から顔を背けて、生活にしがみついで生きているのです。つまりは、「死」を考えないようにして生きているのです。

しかし、そういった考え方は、科学的に見ても、正しくありません。たしかに、科学の守備範囲は、いわば「目に見える世界だけ」に限られておりますけれど、それは決して、「目に見える世界しか存在しない」という意味ではないのです。そんなことは、科学には証明できないことです。それでも、「目に見える世界しか存在しない」と言うのなら、それはただ、そう信じているということをして、一種の信仰のようなものです。

私たちの「目」は、外を向いて付いておりますから、外側の世界ばかり見ておりますが、そんな私たちには見忘れていた場所がある。それは、私たちの内側の世界です。探し物でも、探す場所を間違えては、いくら探しても見つかりません。「外」ではない、「外」ではない。「内」を探せ。「いのち」の真実は、そこにある。世界中の宗教的伝統が、口を揃えて説いているのは、そのことです。

宗教というのは、「目を内に向けて、心の平安をめざす」ものなのです。別の言葉で申しますと、宗教というのは、私たちの視野のなかに「死」を取り戻し、「人生」をフルサイズで受けとめるための、パラダイムを提供するものです。では、それは、どんなパラダイムなのかということになるわけですが、私にとっての宗教といえば仏教ですから、仏教のパラダイムについて、少し、お話しさせて頂こうと思います。

仏教がめざしているのは、この「エゴ」の支配から解放されて、本当の自由になることです。つまりは、「本当の自分」になること、「仏」になることです。

ちなみに、「エゴ」から解放されることを「解脱」と言います。そして、その「解脱」の境地が、「涅槃」と呼ばれる完全な平和です。この完全な自由と平和の境地に到達することをめざしているのが、仏教なのです。完全な自由と平和。いかがですか。これこそ、私たちが本当に願っていることではないでしょうかね。

この別々の人間が、みんな「エゴ」に支配されて、我が身の利益や満足を求めて争っているのです。ですが、海に浮かんでいるように見える島が、実際には、みんな海底でつながっているように、「いのち」の奥底では、私もあなたも、みんなつながっていて、「ひとつ」なのです。最近よく「ワンネス」ということが言われますが、それは、このことです。

「目に見える世界」では、一人一人がバラバラに生きているように見えても、本当は、みんなが「ひとつのいのち」「仏のいのち」を生きているのです。私もあなたもないのです。本当のあなたは、本当の私なのです。私たちはみな、「いのちの仲間」なのです。それが、私たちの「いのちの真実」です。

先ほども申しましたように、「エゴ」というのは「他の誰よりも我が身が可愛い」という心の働きのことです。誰の心にも、この「他の誰よりも我が身が可愛い」という思いが、多少なりともあるものです。

「エゴ」は、極めて巧妙に働いているのです。たとえば、私たちは、苦しんでいる人を見れば、同情を感じますね。それは倫理や道徳の世界では、極めて高く評価されることです。ですが、そういう同情は、たいてい「エゴ」の感情なのです。私たちは、自分より幸せな人に同情を感じることはありませんね。同情するのは、自分より不幸な人に対してだけです。ですが、それは、上から下を見る目なのです。そのうえ、同情が続くかどうかは、相手の出方次第というところがある。相手が感謝しなければ腹も立ちますし、本当は相手の方が幸せではないかと思うようになれば、引きずり落とそうとする。そういう「エゴ」の感情では、本当に人を幸せにすることは出来ません。本当に人を救っていくのは、「いのちの仲間」としての共感なのです。ちなみに、そういう共感を、仏教では「慈悲」と言います。「慈悲」というのは、「本当の自分」の感情のことです。

この図でご覧頂いているように、私たちの「意識」は、目に見えないところで、この「エゴ」に支配されています。そのために、私たちは、自覚はしておりませんが、最終的には、何事も「エゴ」の顔色次第なのです。

その「エゴ」は、「他の誰よりも我が身が可愛い」と、後生大事に「身体」にしがみついている。そのために、私たちは、そんな「エゴ」を通じて、「自分」を「身体」と同一視して、「死」を怖れているわけですが、本当は、「死」を怖れているのは、「自分」ではなくて「エゴ」なのです。人生を考える上で、一番問題になってくるのは、この「エゴ」です。

「私が、私が」という思いは、みな、この「エゴ」から生まれます。「私が、私が」という、その「私」は、「エゴ」に支配されている「偽りの自分」のことなのです。私たちは、その「偽りの自分」を「自分」だと思っている。「本当の自分」ではないものを「自分」だと思って、しがみついているのです。そのことを、仏教では「我執」と言います。私たちの悩みや苦しみや不安は、みな、この「我執」から生まれてくるのです。

さて、話を進める前に、「我執」について、もう少し考えてみましょう。「私が、私が」とは言うけれど、その「私」とは誰なのでしょう。「私とは誰か」。

私たちは、これまでに無数の経験をしております。そして、その経験への評価に基づいて、将来を考えている。その、過去から未来にわたる、無数の思考と感情の束が「私」なのです。それは、いわば実体のない「イメージ」です。自分のなかの「自分像」というのは、「自己イメージ」のことです。そんな「自己イメージ」を生みだしている思考と感情は、誰のものかと言えば、それは、「エゴ」のものなのです。「私」というのは、「エゴ」が生みだしている、ひとつの「自己イメージ」にすぎない。

最近よく「尊厳死」とか「自己の尊厳」とかいった言葉を聞きますが、「自己の尊厳」というのは、よく考えてみれば、たいていは「エゴの体裁」ではないのでしょうか。「エゴ」は、「自己イメージ」を生みだし、その「自己イメージ」を必死になって護ろうとする、それが「我執」。そして、その「我執」から、私たちの悩みや苦しみが始まる。

たとえば、道で誰かに出会ったとします。自分の「自己イメージ」からすると、相手は目下の者だったから、先方から挨拶があつて当然だと思っていた。ところが、知らん顔をして通り過ぎたので、不愉快になった。

すると、この感情に思考がかぶさって、心のなかでオシャベリが始まります。「何だ、あいつは。失礼な奴だ。そういえば、この間も、こんなことがあったな。いやまてよ、あんなことも言っていたな。とんでもない奴だ。今度は、絶対に許さない」。

と、まあ、そんなふうには、「感情」の周りで心の輪が閉じて、「思考」が過去へ未来へと引きずり回しているあいだに、最初の「不愉快」は「怒り」にまで育っている。そして、その「怒り」が火種となって、心の中でブスブスとくすぶり続けるものですから、苦しくて仕方がないということになるわけです。

「自己イメージ」は、傷つき易いものですから、「エゴ」には休む間もない。そんな勤勉な「エゴ」のお陰で、心のなかには、プライドとコンプレックスが山のようにたまって、私たちは身動きがとれなくなっている。とても自由とは言えない状態です。

「自己イメージ」を一番傷つけるものといえば、それは「死」です。「死」は、「自己イメージ」を根底から破壊してしまうものですから、「エゴ」は、決して「死」を考えようとしません。

宗教的な視点を持たない現代人は、この、「エゴ」が生み出して自ら護ろうとしている「自己イメージ」を、「本当の自分」だと思っています。ですが、仏教では、そうは言いません。仏教では、それは「偽りの自分」だと言っています。

では、「本当の自分」は、何処にいるのか。それに対して、仏教は、こう応えます。「本当の自分は、今、ここにいる」と。まるで、禅問答のようなものですが、それは、つまり、こういうことです。

私たちは「今、ここに」いる、と思っております。たしかに、「身体」は「今、ここに」あります。ですが、心が「今、ここに」はいないのです。日常の私たちは、何もしていないときでも、常に休み無く、心のなかでオシャベリをしています。常に何かを考えていると言ってもよいでしょう。

過去を誇ったり悔やんだり、未来に期待したり不安を抱いたりして、決して「今」のこの一瞬にとどまっているということがありません。つまりは、心のなかで過去へ未来へと走り回っている私たちは、「今、ここに」いないということになります。

「エゴ」に支配されている私たちの心のなかで、常にオシャベリをしているのは、言うまでもなく、「エゴ」です。「エゴ」は、心のなかを走り回って、何をしているのかと言えば、過去から、怒りや自惚れの種を拾い集め、未来から、不安や野心の種を拾い集めて、「自己イメージ」を作り出しているのです。

たとえば、「自分」には、これだけの業績があるのだから、もっと評価されてもいいはずだ。このままでいけば、あいつに追い越されてしまうかもしれない。いや、俺には実力があるのだから、今に目に物を見せてやる」といったような具合です。

私たちは、本当は「今、ここに」生きているはずなのです。ですが、「エゴ」は、過去へ未来へとさまよって、幻のような「自己イメージ」を生み出している。そして、それにしがみついて、悩み苦しんでいる。それが、私たちです。

仏教は、そんな「偽りの自分」を離れて、「本当の自分」に戻ることを教えています。そのためには、過去へ未来へと走り回っている、心のなかのオシャベリを止めて、「今」を取り戻すことです。心のなかのオシャベリを止めるということは、「時間」を止めるということでもあります。「エゴ」は「時間」のなかでしか活動できないのです。

一般に、「時」というものは、「過去」から「現在」を経て「未来」へと続く、一筋の流れのようなものと考えられております。しかし、この流れは、「過去」「現在」「未来」という三つの箱を、このように一列に並べたような関係にはなっておりませんね。そうではなくて、「時の流れ」を、この箱で表すとすれば、「過去」と「未来」という、二つの箱がくっついているだけです。そして、このふたつの箱の接点 が「現在」に相当するという関係になっております。「今」というのは、この接点のことです。この「今」という世界には、心のなかのオシャベリが止まったときに、初めて入っていけるのです。

たとえば、私たちの日常意識は、「エゴ」の働きによって、つまりは、心の中のオシャベリによって、こんなふう「過去」と「未来」にまたがっておりますね。このオシャベリが、段々と収まっていったとき、私たちの意識は、自然に、この「今」へと入っていくというわけです。お分かり頂けましたでしょうか。

世界の様々な宗教的伝統には、私たちの心のなかのオシャベリを止めて、この「今」に入っていくための技法が伝わっています。それが、「瞑想」です。「瞑想」には、呼吸を数えるとか、念仏を称えるとかいった、様々なスタイルがありますが、それらはみな、いわば、時間を止める技法なのです。

心のなかのオシャベリが止まったとき、つまりは、「エゴ」の活動が停止したとき、私たちの「意識」は、「エゴ」の支配を離れて、「本当の自分」とつながります。そうなったとき、私たちは初めて、本当の自由と平和を知り、心の平安を得るのです。

ちなみに、「瞑想」とは別の道をたどって、この心の平安に至ることもあります。

死を受け入れられるようになった人は、穏やかな安らぎの境地になるといいます。それはですね、「エゴ」が活動を止めて、「自己イメージ」が解き放たれた結果なのです。心に自由と平和が訪れるのは、もう、護るべきものがなくなったからです。

宗教というものは、死ぬためにあるわけではありません。信仰は、安らかな心で生きるためにあるのです。

「エゴ」が停止して、「自己イメージ」が解き放たれてしまえば、「死」でさえも平然と受容できるのです。「本当の自分」にとっては、「死」は深刻なものではないのです。「死」が深刻でないのなら、人生で深刻なものなど何もありません。そこには、ただ、満ち足りた「今」が輝いているだけです。

仏教が目指しているのは、そんな世界です。そんな世界は、何処に在るのか、と言えば、「今、ここに」在るのです。「今、ここに」在るのですが、私たちが、その「今、ここに」いないだけなのです。

仏の世界は、何処にもなくて、「今、ここに」在るのです。臨済宗の盤珪禪師が、「仏に成ろうとしようよりも、仏でおるのが造作がのうて、近道でござるわいの」とおっしゃっているのは、このことです。

宗派に分かれていても、仏教はみな同じです。「仏道を習う」というのは、自己を習うなり。自己を習うというは、自己を忘るなり。これは、曹洞宗の開祖、道元禪師の有名な言葉ですが、「自己を習う」というのは、「外ではなくて、内を見て、心のな

かを学ぶ」ということです。「自己を忘れる」というのは、「エゴを止めて、自己イメージを解き放つ」ということなのです。その方法が、道元禪師にとっては「只管打坐」、つまり、ひたすら「瞑想」することだったので。

禪宗の対極に在るように思われている浄土真宗でも同じです。浄土真宗では、「はからいを離れて、他力におまかせする」と言いますが、「はからいを離れる」というのは、「心のなかのオシャベリを止める」ということです。

「他力」という言葉には少し説明が必要です。「他力」の反対は「自力」です。「自力」というのは、「エゴ」が「偽りの自分」の満足を求めて行使する力の ことです。つまりは、「努力」のことです。それに対して「他力」というのは、「仏」の力、つまりは、「本当の自分」の力のことなのです。

ですから、「他力にまかせると」いうのは、「本当の自分」の働きのままに生きるということなのです。そして、そんな生活を支えるのが、「念仏」なのです。

しかし、鎌倉時代とは違って、現代の社会では、この「今、ここに」生きるということが、非常に難しくなっていましたね。現代社会は、能率と効率を重んじる競争社会です。ですから、一定時間に、どれだけ多くの仕事を詰め込むかということばかり考えるようになってしまいました。

仕事をこなすことばかりに気を取られて、速くこの仕事を片づけて、次にかかりたいと、追われるように走り続けているのが、私たちです。「速く片づけて、次にかかりたい」というのは、心が「ここに」ないということですから、そうすると、もう「今」を感じる ことなど、なかなかできませんね。

そんな私たちにも、偶然に、「今」を感じるということがあります。たとえば、空に浮かぶ雲を見上げていて、いつの間にか我を忘れて感動していた、というようなご経験は、おありではないでしょうか。「我を忘れていた」というのは、「心のなかのオシャベリが止まっていた、時間が止まっていた」ということなのです。つまりは、そのとき、「今」にいたということなのです。

「我を忘れていた」というのは、「エゴ」が止まって「無我」になっていたということなのです。そのとき、現象世界の「今」と「永遠の今」とが共鳴して、「意識」は、現象世界のなかに「永遠の今」を垣間見たのです。そのときの感動は、「いのちの真実」に触れた感動なのですね。「悟る」というのは、常に、この「今」を感じながら生きられるようになることです。

ところが、「いのちの真実」を学んでいないと、そういったときの大切な体験の意味が分からなくて、うやむやになって終わってしまいます。それでは、非常に勿体ないことだと思いますね。

もう一度、この図をご覧ください。私たち人間には、分離の幻想を夢見ている「エゴ」から、「命の真実」に目覚めている「仏」までの幅があるのです。ところが、私たち現代人は、「目に見える世界が全てだ」と信じて、「目に見えない世界」を切り捨ててしまったのです。つまりは、この「仏」の世界を切り捨ててしまったということなのです。

そのために、「神も仏もない、死ねば終わり」の世界になってしまったわけですが、それはまた同時に、私たちは、こちら側の「エゴ」の世界に閉じ込められてしまったということでもあるのです。

「エゴ」の世界に閉じ込められると、どうなるのか。新聞やテレビで、日々報道されているような世界になるのです。宗教的世界を切り捨てた私たちには、「エゴ」しか残されていません。「エゴ」には、「自分の欲望の実現」にしか関心がないのです。

余計なことを言うようですが、現代社会では、「自分は無宗教だ」と言うのが流行っております。それが、「知識人のステータス」のように思われているのか もしれませんが、「自分は無宗教だ」というのは、いわば「自分にはエゴしかない」と公言しているようなものですから、決して誉められたことではないのです ね。

そんな「エゴ」に支配されている私たちは、欲望の満足を求めて、常に、「何かに成りたい」「何かを手に入れたい」と、まるで導火線が燃えるように生きているのです。ですが、燃え尽きるまで、燃え続けるだけの、そんな生き方のなかに、本当に、「幸せ」があるのでしょうか。

そうではないでしょうか。私たちも、心の何処かで、そうではないと気づいているのです。ですが、では、どうすればよいのかとなると、分からない。違いますかね。それはですね、何度も言うようですが、探す場所が間違っているのです。そっちではない、こっちなのです。

ご自分の生き方は何かおかしいと気づかれたら、どうぞ、立ち止まって、振り向いてみてください。そこには何も見えなくとも、ちゃんと道がある。「本当の自分」への道があるのです。そのことを教えてくれているのが、仏教のパラダイムなのです。

私たちは、日々「忙しい、忙しい」と、まるで、忙しいのが手柄であるかのようにして、生きております。たしかに、私たちの生活は、「忙しく、慌ただしい」ものです。ですが、「忙しい」という字は、「立心偏」に「亡くす」と書きます。また、「慌ただしい」という字は、「立心偏」に「荒れる」と書くのです。「忙しく、慌ただしい」生活は、心を亡くす生活、心の荒れる生活でもあるのです。

そんな「忙しさ、慌ただしさ」に流されている自分を、娑婆の喧噪からすくい上げて「ひとり」になる時を持つ。「本当の自分」と向き合う時を持つ。信仰を持つというの、日々の生活のなかに、「本当の自分」と向き合う時間を持つということなのです。

それは、「自己イメージ」と向き合って、今日を反省し、明日を計画することではありません。そうではなくて、「自己イメージ」を解き放つために、何も考えない時を持つということなのです。それは、「今」に向かって心を開けるということでもあります。

皆さんのお宅に、お仏壇があるかどうか分かりませんが、お仏壇のなかには、「仏様」がある。「仏様」というのは、「本当の自分」のことでしたね。私たち仏教徒が、お仏壇に向かうのは、「本当の自分」と向き合うためなのです。

道元禅師のように「只管打坐」とはいかなくとも、日々15分でも、「本当の自分」と向き合うようになれば、人生は変わって来ると思います。

たとえば、私たちが悩み苦しむのは、たいてい対人関係の問題です。ときには、腹が立って仕方がないとか、悔しくてやりきれないということもあるでしょう。そんなとき、私たちは、感情は、外へぶちまけるか、内へ抑え込むかしかないと考えていますが、手放すという道もあるのです。

人を許すというのは、一歩下がって相手が変わるのを待つとか、あきらめるとかいったことではありません。そうではなくて、人を許すというのは、相手への感情を手放して、自分を解放することなのです。様々な感情を抱きながらも、どの感情にもしがみつかない。それが、仏教でいう「中道」です。「中道」とは、両極端の間を綱渡りする事ではなく、心をニュートラルに保っておくことなのです。

相手は変わらなくとも、よいのです。私の信仰は、私が変わっていくためにあるのです。私の信仰は、あなたを変えるためにあるわけではありません。ましてや世界を変えるためにあるわけではないのです。自分の都合にあわせて世界を変えようとするのは、「エゴ」の発想です。宗教戦争などというものは、ありえないのです。そんなことに気づくのもまた、「本当の自分」と向き合うようになってからなのです。

日々、「本当の自分」と向き合っているうちに、日常生活のなかで、少しずつ「今」を感じるようになってきます。そして、少しずつ「生」が輝きを取り戻してくるのです。

思いますに、信仰の功德というのは、日常の何でもないことに感動し、喜べるようになることでしょうかね。たしかに、日常生活の大半は、ありふれた出来事で占められています。今日することの9割までは、昨日したことと同じなのです。

ですが、本当は、たった一度限りの「今」の積み重ね、それが、人生なのです。「信仰に生きる」「今を生きる」というのは、その、二度と帰ってこない「今」に気づき、その「今」に気づき続けながら生きることなのです。

本当は、「今」しかないのです。花であれ、草であれ、山であれ、川であれ、世界の全てが「今」に満ちている。「光」に満ちているのです。その光に気づかないのは、私たちが「今」にいないからなのです。

皆さん、今日お帰りになって、おやすみになるとき、ただ、シーツの手触りをお感じになってみてください。そのとき、感じておられることこそ、「今」なのです。そこには、「今」しかないのです。

「せいぜい楽しく一所懸命に生きよう」としても、人生が思いもしない方向にねじ曲げられることがある。今日が元気で生きられる最後の日、明日から死ぬまで寝たきりにならないという保証は、どこにもないのです。また、幸運にも、さしたる病気にもならず、長生きしたとしても、人生というのは、思いの外に短いものなのです。

「仏法に明日ということはない、今日の尊さ、今日のありがたさ」。曾我量深先生の言葉です。

資料32 ;航海日誌 (多田野 弘のエッセイ) 後悔について Vol.24(1998年12月) 質問者:○高○木さん。

名誉相談役、やって後悔するのと、やらずに後悔するのではどちらを選ばれますか?

質問がシンプルで、しかも核心をついているので、わたしもズバリ答えます。

「あの時よせばよかったのにやってしまったから、こんなまずいことになってしまった。」とか、「あの時やっておけば、もっといい結果が得られたのに、どうしてやらなかったのか。」と後悔する経験はだれしもあると思います。

結論から言いますと、私はあなたの言われている、そのどちらを選びません。あなたの言うどちらにも、「事後」に後悔が来ますが、私は逆のことを考えています。即ち、事前に、決して後悔しないと自分に約束してからでないと、やるか、やらないかを決めることはありません。

ですから、一旦決めたことは、たとえどんな結果になろうとも決して後悔することはありません。全て自分が決めて、自ら招いた結果だから、良い結果も、悪い結果もすべて受け容れます。特に良くない結果の場合、自分にとって必要だが与えられたのだと受け取り、これを自分の成長の糧にすべきと考えています。つまり、失敗することは成功する為の必要条件であり、逆境は人間の成長進歩に無くてはならない天からの恵みであります。また、後悔することのない人生を得ようとするならば、充実した悔いのない一日の積み重ねによってしか得られません。

「自己を知る」Vol.37(2000年1月) ; 新しい年を迎えて、何かしら厳粛な気持ちにさせられる。私も齢80を数えて、これからどう生きるかを総括してみて、これまでの生き方考え方、心のあり方に誤りが無かったかを調べねばならない。

反省ということは良く言われているが、私にとってこれぐらい効き目のない言葉はない。情けないことだが事実である。これまで、自分をもっと伸ばし良くするには、生き方、考え方、心の持ち方をどう改めるかしか頭に無くて過ぎてきた。そのため、結果がどうあろうと悔いはないと思っているから、どうしても反省することから遠のいてしまうのである。何と言う傲慢さかと思ったりもするが、この傲慢さをなくすにはどうすればいいかを考えている。

哲人は「己を知れ」と言ったが、私たちは多くのことを知っていても、自分のことは一番分かっていない。自身のことが分かってなくて何が始められようかと自問自答してするのである。私たちの目や耳は外に向かってしか働かないから、自身の内側を見たり、心の眩きに耳を傾けようとしな。自分のイビキも自分の耳に一番近いが、自分だけが聞いたことが無いのも事実である。また、自分の顔や姿には形があり、写真や鏡を通して美醜を見ることが出来るが、形のない心の美醜や歪みを知ることができず、気付かないまま過ごしているように、自分の本当を知ることは至難の業である。

私たちは「気付き」がない間は自分の生き方を変えようとはしない生きものらしい。外部からの知識情報、他からの忠告も、本心から受け容れ行動変容に至ることは稀である。(私には特にそのきらいがある)。心の底から揺り動かされるような感動、目から鱗が落ちるような気付きがなければ本心から変わったことにはならない。

このような「気付き」はどうやって起こるのだろうか。私の僅かな体験から言えることは、困窮の極みに達した時、或いは、絶望の状態におちいってはじめて自らの限界を知り、藁をも掴む思いになった時、始めて自分の無能さ、傲慢さ、心の醜さに気付かされ、そこから新しい生き方を発見できるのではないか。

40年程前、私は京都山科にある一灯園という修養団の3泊4日の研修に参加したことがある。その中に1日便所掃除が含まれていた。私はそれぐらいわけなくやってみせると意気込んで出かけた。バケツと雑きん、タワシを腕に下げ、山科の町を一軒一軒「私の修行の為、お宅の便所を掃除させて下さい」と合掌して頼んで歩いた。

「結構です、もう掃除終わってます」と言われるのはまだいい方で、私の顔を見るなりピシャッと戸を閉められる。中には「商売の邪魔になる、早ようあっち行け」と罵られ、何軒行っても断られ通した。断られるのは道理、何処の馬の骨かも分からぬ男に、誰が家の中の恥部を進んで見せようとするだろうかとも思ったが、何処も相手にしてくれないのは事実である。情けない思いで町中をうろついている自分が浅ましく哀れに思えた。何と、便所掃除さえさせてもらえない不甲斐ない自分であるか、自分の無能さ加減を嫌と言うほど思い知らされた。そんなことで人の上に立つ資格があると言えるのか、このまま尻尾をまいて高松へは帰れない、土下座してもいい、石に噛り付いてもさせてもらおうと悲壮な気持ちで相手を拝んだ。

すると、その思いが通じたのか、始めて受け容れてくれた。嬉しかった、私は夢中になって便器に飛びついた。もう汚いも臭いも少しも気にならない。ああ、これでやっと一人前になれたと思った途端に、涙が込み上げてきた。涙の溢るにまかせて掃除を終え、素晴らしい体験をさせていただいたお礼を述べた。心が洗われたように晴れ晴れとして、もうどんな嫌なこと苦しいことがあっても乗り越えられる自信ができた。それまでの私は、自分が少なくとも一人前だと己惚れており、小なりと云えども会社の社長である、こんな所で便所掃除などする人間ではないんだと言う、変なプライドが大きく私の成長を妨げていることに気がついた。

そしてなお、この素晴らしい体験を再び味わえないものか、京都は旅先だから出来たのであって、地元でもそれが出来なければ本物ではないと思い、翌年から同好の志と共に高松で始めた。以来毎年続けてきたが、馴れと加齢の所為か当初のような感動は薄れ、大きな心境の変化が見られなくなった。(後略)

資料22 ;「人生の目標」 塩沢俊一

はじめに ; ここに、山本道雄教授から依頼を受けて、白い虚塔の中に生きて色々と考え経験して来た事柄の中から、人生の目標について論じてみたい。若者にとって、人生の目標は最も重要で、一生をかけて問うべき永遠の課題である。しかし今や、世界のどこでも人生の目標・生きる意味を問う若者はいないように思う。実際の所、人生はもっともっと広く深く暖かいのであるが、現代社会も若者に即戦力を要求し、じっくり考えた末の結論や熟成を求めない短小軽薄の時代である。私は人材という言葉が大嫌いである。人は人であり、材料(人材)ではない。人は人生において、よく考え実践し、反省して、真に成熟するために生まれて来ていると私は思う。

現代人は多忙に多忙を極めそんなに急いで、いったい何処へ行こうとしているのか？最近は一流大学を卒業しても、知力だけで、教養のない若者が多いと嘆かれている。正にその通りであるが、私は内科医として多くの日本人の人生を見ていて、胆力のある人が育っていないのが最大の問題であると考えている。胆力は苦勞なしには醸成されない。目の前の大きな壁を乗り越えようと失敗し必死に努力する中でしか鍛えられない。「少年よ、大志を抱け」の通り、若者はまず出来る限り高い目標を設定し、これを生涯かけて乗り越える努力すべきである。そして大学は、如何なる困難にも耐えて人類の未来を支えることのできる「強靱な精神をもつ人」をこそ育てるべきである。

先人に学びながら ; 私は膠原病という人類の抱える最大の難病の専門医であるが、その前に内科医であり、診療では心を開いて患者さんの繰言に耳を傾けることに深い喜びを感じている。患者の語る所に注意を集中するのは蓋ししかるべき名医のわざで、“The patient is telling you the diagnosis”、すなわち「患者はあなたに診断を示している」(ウィルサム・オスラー)のである。私はこれまで幾多の患者に接し見送ってきたが、それでも、母を超えるほど苦しい患者を未だみない。母は私の小さい頃入院し、小さかった私の土日は病院のリングルの点滴ビンの中で過ぎていた。病気は本人のみならずこれを取り巻く社会や家族にもそれなりに忍耐を強いる。父は大黒柱、母はそれを支える大地、そしてその屋根の下に子供は育つ。女子として唯一の悲願であった暖かい家庭が作れず、この事を母は病気の中でいつも詫びていた。それでも母は、四肢もままならず目も殆ど見えない中で、強く明るく死ぬまで私達の支えとなってくれたが、それには一つの転回点(廻心)があった。

それまでは患者の常として、母も連日自身の不幸を嘆かない日はなかった。父が忙しかったので、私が愚痴の聞き役だったが、ある日を境に一言も愚痴をこぼさず強く逞しくなった。家族もそれにつられて不自由な中にも幸せを味わうようになって行った。後で知ると、家は代々浄土真宗で、それが母の廻心(仏様との出会い)の機会であった。それは私が高校生の頃で、当時山岡荘八著「徳川家康」が実業家の愛読書になっていて、父が買ってくるものだから、私もそれを読むようになったが、家康の旗印が「厭離穢土 欣求浄土」であったことに大変驚いた。弱肉強食の血で血を洗う群雄割拠の中に理想を掲げて進む武将の姿がそこにあった。家康には、石田光成との決戦前夜、関東にあって何も行動しない空白の期間がある。この間一心に写経をしていたと山岡荘八は書いているが、この間手紙を書きまくり敵方を寝返らせるのに腐心していたとする説もある。しかし私には、家康は動けなかった、というか、自身の生きざまを大きな命の流れに試していたように思われる。家康も浄土宗の篤信家で、「人生は重荷を負って遠き道を行くが如し急ぐべからず……及ばざるは過ぎたるより勝れり」は家康が死の数年前孫に書き与えた書である。私は東照宮で買った家康の真筆のコピーを表装して私の机の前に掲げている。家康公の胆力を努力目標にしている。

道を求めて ; 信仰が人を如何に強くするかに深く感動した私は、京都女子大学教授・宮地廓慧和上(後年の西本願寺勧学)に師事して道を求めるようになった。私は母の病気を機縁に小学生の時医師を志し、治らない病をもつ患者のそばに居てその慰めとなり分からない事は研究して解決する医師になりたかった。医師を志す私に「人を愛せるか？」は当時最重要の課題で、勉強の傍ら、西田幾多郎、ドストエフスキー、芥川龍之介、亀井勝一郎、教育の父ペスタロッチの著作などを読んだ。蓋し人が発する人生究極の言葉は、辞世と相聞であるという。辞世は人生最後の言葉、相聞(そうもん)は愛の言葉である。愛は人生で最も貴重で、道元は「愛語よく回天の力あり」(正法眼蔵随聞記、岩波文庫)と言うが、誰も優しい愛の一語によって救われた(天が回る)経験があると思う。「俊ちゃんは誰々がああたこうだとすぐ文句を言うが、そうではなくて、もっと広く大きな心で人を包んであげて欲しい」、これが私の学生時代53歳で生涯を閉じた母の別れの言葉であった。

その後の医学部の生活は正に白い虚塔で、その中で私は理想の医師を目指して苦闘した。しかし、患者のためにと言いながら自らの立身出世を追い求めて、理想と正反対の方向に奔走している自分の醜い現実と直面し、私の中の理想の医師は脆くも音を立てて崩れた。一般にいう絶望は、周囲に対して我(われ)が絶望するのであって絶望している我(われ)は健在であるから逃げ道がある。しかし、生きる証(あかし)としての医師である我(われ)を我が身が信じられないとなるともう逃げ道はなく、「ひと問わば海を山とも答うべし 己が問わば何と答えん」と完全に行き詰ってしまった。

禪の悟りは「百尺竿頭なお一步」といい、百尺の竿の先に立って尚一步踏み出す、それは完全な自己放擲である。道元は「我を忘れて佛の方(かた)へ投げ入れて」と表現し、「人は絶望の暗闇の中で神の手に直(じか)に触れることができる」(ペーサーベン)の正にその通り、行くもとどまるも還るもならず、百尺竿頭なお一步を踏み出した私は、瞬間すでに佛の懷に抱かれていた。「闇夜に鳴かぬカラスの声を聞く」と称される佛の声を聞いた、それが私の廻心であった。それは思議を超えて(不思議)佛の方からすでに用意されてあった寿命無量、光明無量の世界であった。

法然上人は万巻の経を読んで分らず 40 歳を超え涙にくれて経を繰る中で善導大師のこれまで幾度と読んでいたはずの言句に触れて、また親鸞聖人は師法然の言句の下で、そして親鸞と同時代の宗教的天才道元は中国慧可禪師の叱咤の下で、それぞれ廻心されている。さらにロシアでも、ドストエフスキーの「罪と罰」は貧しい庶民を救うために金貸しの老婆を殺害した青年のストーリーであるが、ソーニャという信仰深い恋人に説得されて結局自首してシベリアに流される。女性の徳というか有難い事に、そのソーニャが青年について一緒にシベリアに行く。そして地の果ての孤独の中で貧しい二人は神に出会う(「全き平和をみた」と表現されている)。私が興味深く思うのは、真実の信仰はその到達点が古今東西を問わず同じであり、また論理的に言うならば、「葉っぱのフレディ」や手塚治虫の「ブッタ」のように、我を否定してすべてを包む大いなる命の流れに生かされる、ということである。

要約すれば、廻心はまだ「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪冴えて涼しかりけり」(道元)というごく当たり前のことである。しかし、我執があると花が花に見えず秋に月が見えず、我執を捨てる(無我)のは存外に難しいのである。また、欧州では別の視点からカントが、世の中で凡そ値段のつくものを除外していった、結局生命(いのち)だけは与えられたものであるから値段がつかないと考え、これを生命の尊厳と呼んだ。仏教で言えば仏、キリスト教で言えば神である。生命はたった一つだから尊いのではない。与えられるから尊いので、与えられたという点で生命は生きとし生くる者に共通で、そこにヒューマニズムの原点がある。

道に生きる ; 死について考えてみると、真の絶望を機縁にして小さな我(われ)を捨てて大いなる生命(いのち)の流れに同化するの、魂の死(無我)であり死して真に生きる世界(無生法忍)である。これに対して、日常の死は肉体の死である。その死は、我は我のまま死んで行く死であり、我(が)は存続したまま転生・輪廻する迷いの世界であると仏教は教える。輪廻があるか否かは私には分からないが、もしかして、人生は小さな我を捨てて大きな我(いのちの流れ)に生かされる道(真に生きる世界)を究めるために在るのではなからうか？

私は信仰がすべてとは言わないし、無神論者で後述する渋沢先生のような偉い人も確かにおられる。しかし、真実の宗教は自らを照らす鏡である。科学の批判にも十分耐える。とはいえ、宗教は往々にして自立心のない人の理性を曇らせる。そうになると、「宗教は阿片」(マルクス)である。神父の真意はともかく、キリスト教が幾多の侵略戦争を先導したのは歴史に明らかであるし、近くは我が国で最低の愚者を尊師と崇めるあほらしいエセ宗教もあった。信仰の名の下に集団化すると自己弁護が成立しやすい第一に安易である。しかし、真実の宗教は自己の自立を促し、自己に対してもっとも厳しい。

いずれにせよ、人は正当な人生観を持つべきである。正当な人生観とは何か？それは自らを省みる鏡をもち、終生自らを省みることのできる人生であると思う。明治の大実業家・渋沢栄一氏は、私も愛読している論語の讃仰者であるが、宗教より論語の教えの方が現実的で分かりよいと言って、論語の教えを守って毎夜、今日一日の自身の行為を反省しておられた。指導者には何より反省が必要で、正義とのみ信じて突き進むのは危険である。最近は大企業のトップが次々と摘発されて、誰が偉いのか分からなくなって来ている。今一度、真の偉さとは何か？について考えてみてはどうだろうか。

おわりに ; 人生に重要なものは正義ではないと思う。大切なのは、不義をも包み込む優しさである。太陽の明るさは人を元気にしてくれるが、苦悩に沈む人を心底救うのは、その人を想う熱い涙である。むかし、良寛が放蕩三昧の甥の更生を託された。良寛の下でも甥は相変わらずであったが、良寛は何も言わない。やがて、約束の帰る日が来て、心踊るその甥は「たまには草鞋の紐でも結んでやるか」と多少の親切心から良寛の足下に跪いた。その時、草鞋の紐を結ぶ甥の手にポタリと一滴涙が落ちた。それでその甥は改心したと聞く。遠く憶えばこの私も、父母、恩師、先輩、後輩の涙によって支えられて今日がある。尊敬している故大平首相(小渕首相にしても私が尊敬する首相は何故かすぐ死ぬ)の「政治の心は明日枯れるとわかっている花に水をやる心である」の言葉を医学に引き当てて、医師としての与えられた天職を私も涙をもって実践したいと思っている。(神戸大学医学部保健学科 教授 塩沢俊一)